

釜ヶ谷古窯跡群

静岡県大須賀町釜ヶ谷地区区画整理事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合

釜ヶ谷古窯跡群

静岡県大須賀町釜ヶ谷地区区画整理事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合

序

大須賀町は背後に小笠山を控え、前面は遠州灘に臨む風光明媚な土地柄に加え、江戸時代には横須賀藩三万石の城下町として栄えました。しかし、東海道本線が小笠山の北側にある掛川を通過するなど、東海道の回廊地帯から離れたこともあって、最近では、時代の面影を色濃く残す閑静な町となりました。

この閑静な町も、春の桜が満開になりますと県指定無形民俗文化財の三社囃子が響き、山車の曳き回しが勇壮に行われ、祭りをこよなく愛する横須賀人の心意気が伝わってきます。

さて、歴史と文化と自然に満ちた町にも、昭和40年代から各種優良企業の進出が見られるようになり、人口も増加の傾向を辿ることとなりました。

その一方では、農業生産が衰退し、生産性の低い小笠山丘陵の谷間にある農地の荒廃が目立ち始めました。

そこで、この地域を優良住宅とし、大須賀町に転居される皆様に供給しようという動きが顕著となり、昭和61年に釜ヶ谷土地区画整理組合設立準備委員会が発足する運びとなりました。釜ヶ谷地区の農地は荒廃が進み生産性の低い土地でしたが、学校・役場等の施設に近いという利便性があり、早くから宅地開発が有望視されていました。

この地区には、平安時代に茶碗を焼いた窯跡があるということは当初より承知しており、古代の大須賀の産業を知る重要なものと理解していました。このために、保存して後世に伝えることはできないものかという検討もしてみましたが用地のほぼ中央で斜面に立地しているという条件下では現地保存は困難という結論に達し、記録を保存することをお願いしました。

遺跡の調査は、平成3年度に確認調査、平成5年度から8年度にかけて本調査が行われ、大須賀町の歴史を知る貴重な資料を得ることができました。

そして、平成8年3月24日には大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合設立総会が開かれ、本格的な造成作業を開始することとなりました。

ここに区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査の記録が刊行されることとなり、大いに喜ばしく感じております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書までご協力いただきました大須賀町教育委員会、大須賀町役場を始めとしました関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成16年3月

大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合
理事長 岡本 啓

例　言

1. 本報告書は、平成5年2月1日から平成8年11月18日の期間に、大須賀町西大渕字釜ヶ谷地内で実施した釜ヶ谷窯跡群の調査報告書である。
2. 本調査は、大須賀町釜ヶ谷土地区画整理事業用地内の埋蔵文化財の発掘調査である。
3. 発掘調査は、釜ヶ谷土地区画整理組合の委託で大須賀町教育委員会が静岡県教育委員会文化課の指導の下で行った。
4. 発掘調査の体制は以下の通りである。

年　度	教　育　長	教育委員会事務局長	社会教育係長	担　当
平成4年	金原與四郎	大久保忠彦	大石　武夫	木佐森道弘
平成5年	金原與四郎（9月まで） 太田　勝昭（10月から）	大久保忠彦（5月まで） 山下　京一（6月から）	大石　武夫	木佐森道弘
平成6年	太田　勝昭	山下　京一	岡田　昌子	木佐森道弘
平成7年	太田　勝昭	山下　京一	岡田　昌子	木佐森道弘
平成8年	太田　勝昭（9月まで） 山下　富雄（10月から）	大石　仲雄	岡田　昌子	木佐森道弘

5. 資料の整理は大須賀町教育委員会が行ったが、各種測量図面の編集・製図、出土遺物の復元・実測・写真撮影・編集・製図、および、報告書の編集は、大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合の委託を受けた株式会社フジヤマ（社長藤山義修）が支援した。
6. 本書の執筆は、大須賀町教育委員会木佐森道弘が監修し、下記の執筆分担で行った。

第Ⅰ・Ⅱ章 木佐森道弘

第Ⅲ章第1節1、第2節1、第3節1、第4節1 森永明美

第Ⅲ章第1節2、第2節2、第3節2、第4節2、第IV章 菅原雄一

7. 本書に掲載した挿図は、全てグラフィックソフトで作成した。

8. 発掘調査および報告書刊行には多くの先学諸兄のご指導を得た。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

市原壽文 加藤恵美子 加藤理文 桑原　武 後藤建一 五島康司 槙原祥子 坂巻隆一
佐野五十三 篠原修二 柴垣勇夫 柴田　稔 柴田　睦 渋谷昌彦 鶴野雄康 杉山　孝
塙本和弘 戸塚和美 羽二生　保 前田正一 松井一明 向坂剛二（順不同敬称略）

目 次

序

例言

目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法と調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的・歴史的環境	2
第2節 周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 各地点の遺構と遺物	5
第1節 A 地点の遺構と遺物	5
1 遺構	5
2 遺物	5
第2節 B 地点の遺構と遺物	6
1 遺構	6
2 遺物	11
第3節 C 地点の遺構と遺物	23
1 遺構	23
2 遺物	29
第4節 D 地点の遺構と遺物	35
1 遺構	35
2 遺物	47
第Ⅳ章 まとめ	57

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	調査地点位置図	4
第3図	A地点全体図	5
第4図	B地点全体図	6
第5図	B-1号窯実測図	7
第6図	B-1号窯灰原実測図	8
第7図	S X 0 1・S X 0 2実測図	9
第8図	S X 0 3実測図	10
第9図	B-1号窯出土遺物（1）	12
第10図	B-1号窯出土遺物（2）	13
第11図	B-1号窯出土遺物（3）	14
第12図	B-1号窯出土遺物（4）	15
第13図	B-1号窯出土遺物（5）	16
第14図	B-1号窯出土遺物（6）	17
第15図	B-1号窯出土遺物（7）	18
第16図	B地点出土遺物	19
第17図	C地点全体図	24
第18図	C-1号窯実測図	25
第19図	C-1号窯窓体内遺物出土状況図	26
第20図	C-2号窯実測図	27
第21図	S X 0 4・S K 0 1実測図	28
第22図	C-1号窯出土遺物（1）	32
第23図	C-1号窯出土遺物（2）	33
第24図	C-2号窯・C地点出土遺物	34
第25図	D地点全体図	35
第26図	D-1号窯実測図	36
第27図	D-1号窯灰原実測図	37
第28図	D-1号窯灰原遺物出土状況図	38
第29図	D-1号窯出土遺物（1）	39
第30図	D-1号窯出土遺物（2）	40
第31図	D-1号窯出土遺物（3）	41
第32図	D-1号窯出土遺物（4）	42
第33図	D-1号窯出土遺物（5）	43
第34図	D-1号窯出土遺物（6）	44
第35図	D-1号窯出土遺物（7）	45
第36図	D-1号窯出土遺物（8）	46

挿表目次

出土遺物観察表（1）	50
出土遺物観察表（2）	51
出土遺物観察表（3）	52
出土遺物観察表（4）	53
出土遺物観察表（5）	54
出土遺物観察表（6）	55
出土遺物観察表（7）	56

写真目次

写真 1	1 A 地点遠景（北より）	写真 12	1 D 地点全景
	2 A 地点発掘状況（東より）		2 D 地点調査状況（西より）
写真 2	1 伐採作業風景（B 地点）	写真 13	1 D - 1 号窯発掘状況
	2 B 地点作業風景（西より）		2 D - 1 号窯及び灰原
写真 3	1 B 地点遠景	写真 14	1 D - 1 号窯灰原遺物出土状況
	2 B - 1 号窯全景		2 D - 1 号窯灰原遺物出土状況
写真 4	1 B - 1 号窯及び灰原	写真 15	1 C 地点付近石垣遠景
	2 B - 1 号窯灰原近景		2 C 地点付近石垣近景
写真 5	1 B - 1 号窯灰原遺物出土状況	写真 16	B - 1 号窯出土遺物
	2 B - 1 号窯灰原遺物出土状況	写真 17	B - 1 号窯出土遺物
写真 6	1 B 地点 S X 0 1・S X 0 2 近景	写真 18	B - 1 号窯出土遺物
	2 B 地点 S X 0 1 遺物出土状況	写真 19	B - 1 号窯出土遺物
写真 7	1 B 地点 S X 0 2 遺物出土状況	写真 20	B - 1 号窯出土遺物
	2 B 地点 S X 0 3 遺物出土状況	写真 21	B - 1 号窯・B 地点出土遺物
写真 8	1 C 地点調査状況（南より）	写真 22	C - 1 号窯出土遺物
	2 C - 1 号窯及び灰原	写真 23	C - 1 号窯・C 地点出土遺物
写真 9	1 C - 1 号窯遺物出土状況	写真 24	D - 1 号窯出土遺物
	2 C - 1 号窯全景	写真 25	D - 1 号窯出土遺物
写真 10	1 C - 2 号窯全景	写真 26	D - 1 号窯出土遺物他
	2 C - 2 号窯近景	写真 27	D - 1 号窯出土遺物
写真 11	1 C 地点 S X 0 4 遺物出土状況	写真 28	D - 1 号窯出土遺物
	2 C 地点 S K 0 1 遺物出土状況		

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

大須賀町周辺は、浜松市と静岡市の中间部分に位置することから企業の進出も顕著で、近隣市町村では住宅地の造成や人口の増加が顕著にみられた。しかし、大須賀町では人口の伸びは停滞気味で、微増微減を繰り返していた。このような状況を受け町民から、住宅の造成と人口増を望む声が聞かれ、町の中心部に位置するこの地区に区画整理事業が計画された。

昭和61年10月に区画整理組合設立準備委員会が設立され以後対象地域の地権者の仮同意が徐々に得られるにしたがい組合の正式設立に向け具体的に進められていった。事業の進捗に伴い組合設立準備委員会と関係各機関と話し合いがもたれた。その一環として町教育委員会と再三の話し合いが行われ、町教育委員会からは同地区には周知の遺跡として釜ヶ谷窯跡群が存在し、その周辺には未知の遺跡が存在する可能性が考えられると回答した。しがって、事業施行にあたっては、まず全城にわたる遺跡詳細分布調査を実施して遺跡の分布状況を把握し、その後、その結果に基づく本発掘調査が必要である事を伝えた。

このような経過を経て、平成3年度に国庫補助事業として大須賀町教育委員会が詳細分布調査を行った。その結果予定地域の中央を東西に流れる小川の南側の尾根上の平坦面（A地区）小川北側尾根の3地区（B地区、C地区、D地区）の4地区に窯跡等の遺跡が分布する事が判明し、これら4地区について平成4年度から本調査を実施する事となった。

第2節 調査の方法と調査の経過

本調査は釜ヶ谷区画整理組合準備委員会（大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合）の委託を受け、大須賀町教育委員会が発掘主体者となり、分布調査により特定された4地区について、平成4年2月1日より開始した。区画整理事業の進捗等に合わせ順次各地区的発掘調査作業を進めた。平成4年度、5年度に小川北側のA地区、その後、平成6年度、7年度、8年度に小川北側のB地区、C地区、D地区の本調査を実施し、平成8年11月18日に現場調査を終了した。概ねB地区、C地区、D地区の順に調査を進めていった。

A地区は方位に合わせた任意の10mメッシュの発掘グリッドを設定した。B地区、C地区、D地区は国家座標に合わせた10mメッシュを設定し、南北方向ライン（縦方向）は北から南にアラビア数字、東西方向ライン（横方向）は西から東にアルファベットを付した。グリッド名はグリッド北西隅の縦横方向交点名とし、H 8グリッド、H 9グリッドなどと呼称した。ABC各地区は地形等で区分出来るので、遺構名にもB-1号窯のように、地区的アルファベットを付し遺構の混同を避けた。出土遺物についても注記の際、台帳番号の前に地区アルファベットを付して区分した。

調査地区は荒廃農地が多く、樹木等の伐採から作業を開始し、重機等で表土除去を行った後、人力により遺構検出作業、実測作業、写真撮影を行った。B・C地区については空中写真測量も行った。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

大須賀町は、北側の小笠丘陵に抱えられるようにして、遠州灘の海岸平野を生産の場とした温暖な町である。

現在は小笠郡に属し、掛川市との交流が盛んであるが、律令時代には遠江国城飼郡に属しており、小笠山塊の南麓から東麓との交流が中心であった。

江戸時代には、遠州横須賀藩3万5千石（西尾忠尚以降）の城下町として栄えた。

横須賀藩の成立は、信玄・家康の攻防戦と深く係わっているが、太平の世となった後も廃城とならなかつたのには、大須賀町の西部から浅羽町の東部にかけて所在した湯湖が、荒波で名高い遠州灘に面した数少ない湊として機能したことが大きい。この湊は、横須賀湊と呼ばれ、町内の清水邸の行まいは、その湊の隆盛を今に伝えている。

さて、釜ヶ谷窯跡が所在する大須賀町西大渕5983-6付近は、西大谷と通称される谷地形を形成し、本窯跡はその支谷にあり西大谷川の支流の小川が谷底を流れている。しかし、西大谷川とこれらの支流は、小笠山塊から押し出された多量の礫に覆われた谷内を流れるために、通常では流水を見ることができず、典型的な伏流形河川の様相を呈している。

西大谷川は小笠丘陵の南側に展開する海岸平野に出ると扇状地を形成し、その高位部を流れて遠州灘に流入するが、この部分では教科書的ともいえる天井川となっている。

また、釜ヶ谷窯跡も所在する位置での山塊と海岸平野との間では、繩文海進に伴う浸食による海食崖を形成しており、小笠丘陵南麓の概念に属するといえる。

以上のように、前面に海岸平野を擁する山塊の谷地形に所在する釜ヶ谷窯跡は、学史的には清ヶ谷古窯跡群と通称されている窯跡群を構成している中では最東端に位置している。この地点は、古くから窯跡の所在が知られており、「横須賀元歴代明鑑」では「釜ヶ谷の事先年此山に於いて磁器を造り候由、今に磁器の割れたる堀出申、右磁器を焼きたる釜の有るに依て釜ヶ谷と云ふにや」（「遠江資料集」より）と記されている。また、「横須賀原始考」には「釜ヶ谷と云ふも昔磁器つくり住みて焼物をつくり…略…今も陸田の堀等衆焼のこぼれそここにみゆるなり…」（「遠江資料集」より）と記されている。

後者は、文化2年（1805）に書かれたものとされていることから、江戸時代の後期には畠地化かされた景観であったことを窺い知ることができる。

第2節 周辺の遺跡

清ヶ谷古窯跡群は、一般的には袋井市岡崎に所在する衛門坂窯跡を西端とし、釜ヶ谷窯跡を東端とした直線で約4.5kmの範囲に点在する古墳時代から平安時代の窯跡群を指している。したがって、その立地の状況からは、清ヶ谷古窯跡群と呼ぶよりは、小笠山西南麓窯跡群と呼んだ方がよいのではないかと思うので、以後は小笠山西南麓窯跡群と記す。

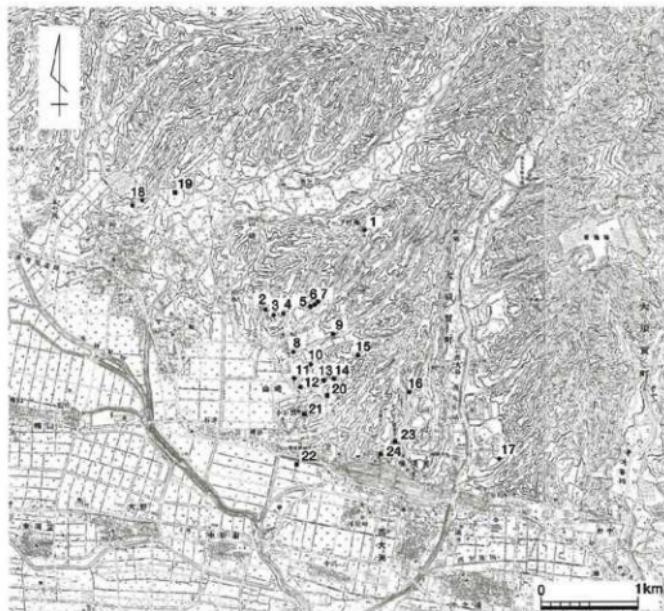
本窯跡群最古の事例は6世紀前半とされる衛門坂窯跡であるが、これに続く時期に該当する釜ヶ谷

C-1号窯跡まで連続するようである。しかし、釜ヶ谷C-1号窯跡と後続の五郎右衛門窯跡とは連続しない。

五郎右衛門窯跡に続く竜天堀師堂窯跡で焼成された瓦は遠江国分寺創建時の瓦窯と目されている。さらに、水ヶ谷奥窯跡の製品は8世紀末ころと考えられているが、袋井市坂尻遺跡（遠江国佐野郡衙？）から出土する製品に酷似しており、官衙との関連が推察される。

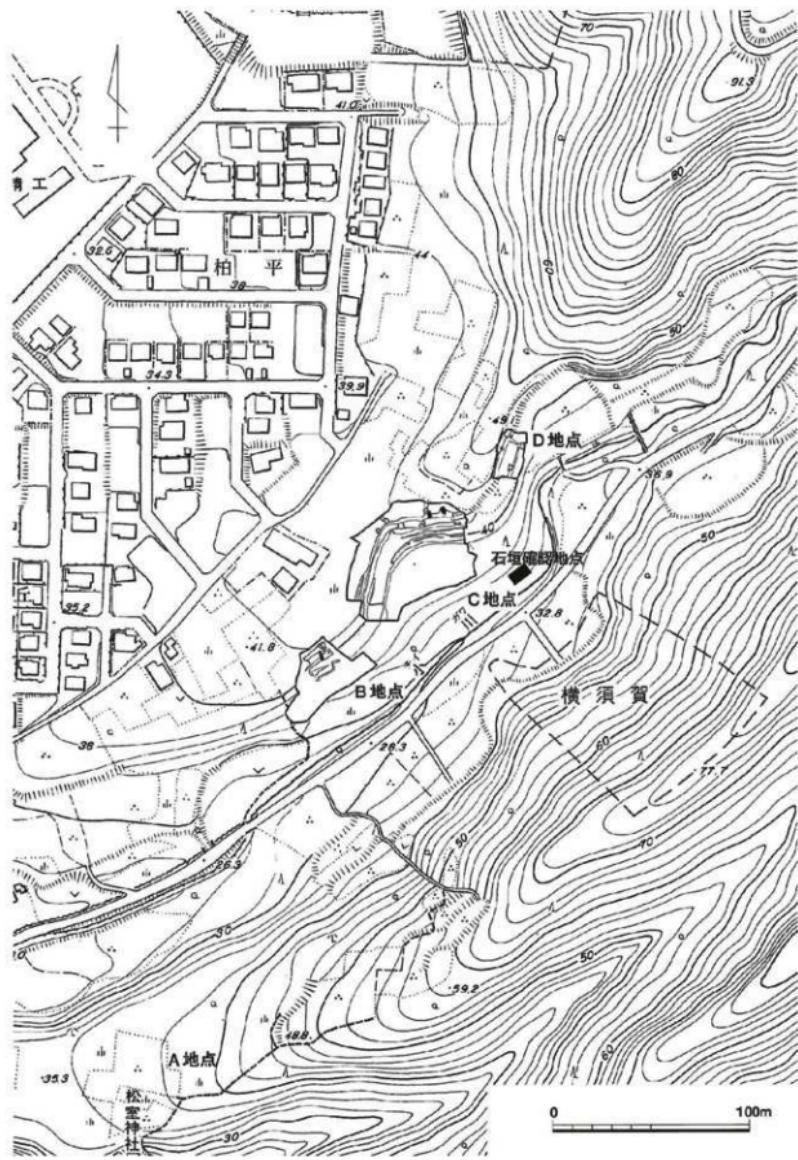
以上のような生産遺跡に対する関連遺跡は明確になっていないが、浅羽町北野遺跡は衛門坂窯跡の製品を搬出した遺跡ではないかと考えられている。また、松尾遺跡も製品搬出と係わりのある遺跡と考えられるが、詳細は不明である。

なお、このような生産遺跡の成立には、冒頭で示した湯瀬の存在が大きかったことが推察される。



第1図 周辺遺跡分布図

小笠山西南麓窯跡群		周辺遺跡	
1	五郎右衛門窯跡	10	竜天東窯跡
2	兎瀬窯跡	11	竜天窯跡
3	兎瀬赤山窯跡	12	水ヶ谷窯跡（近世窯）
4	佐平治窯跡	13	五郎山窯跡
5	白山みかん山窯跡	14	四番山窯跡
6	白山1～3号窯跡	15	水ヶ谷奥窯跡
7	栗山みかん山窯跡	16	樹木ヶ谷窯跡
8	高東窯跡	17	竜ヶ谷窯跡
9	寺ヶ谷窯跡	18	衛門坂古窯跡群
19		19	大畠遺跡
20		20	小谷田遺跡
21		21	町中遺跡
22		22	松尾遺跡
23		23	愛宕山遺跡
24		24	愛宕山横穴群



第2図 調査地点位置図

第Ⅲ章 各地点の遺構と遺物

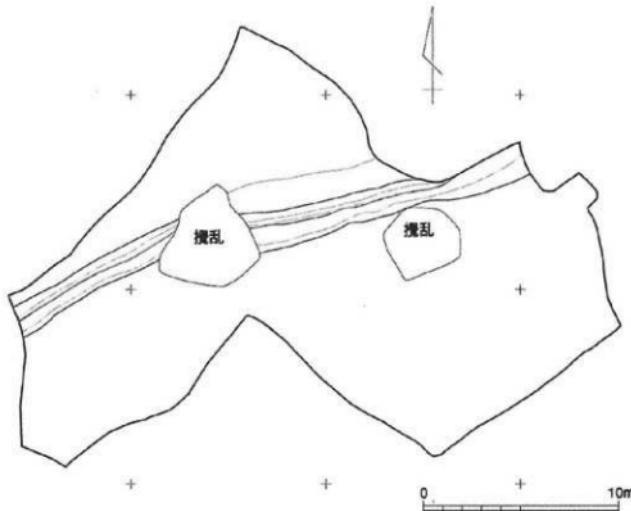
第1節 A地点の遺構と遺物

1 遺構

この付近は「ヤマデラ」と通称されていたことから、寺院跡などを予測して調査したが、近世以降と思われる溝状遺構が発見されるに止まった。

2 遺物

遺物は灰釉陶器および近世以降の瓦の細片がわずかに出土したのみで、いずれも図化できる遺存状態にはない。



第3図 A地点全体図

第2節 B地点の遺構と遺物

1 遺構

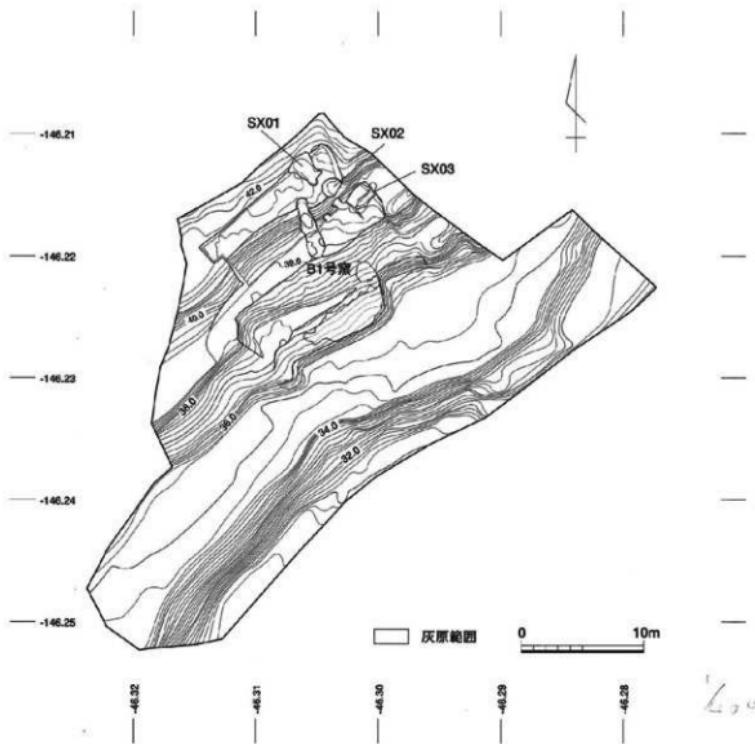
B地点からはB-1号窯と、陶器窯りと思われる遺構が3ヶ所確認された。遺構は斜面部で確認されており、B地点の平坦地は後世の耕作により擾乱され、遺構は確認できなかった。

1) B-1号窯

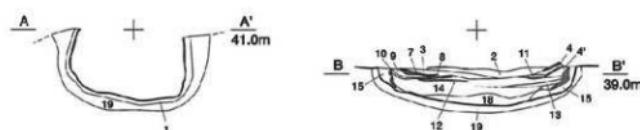
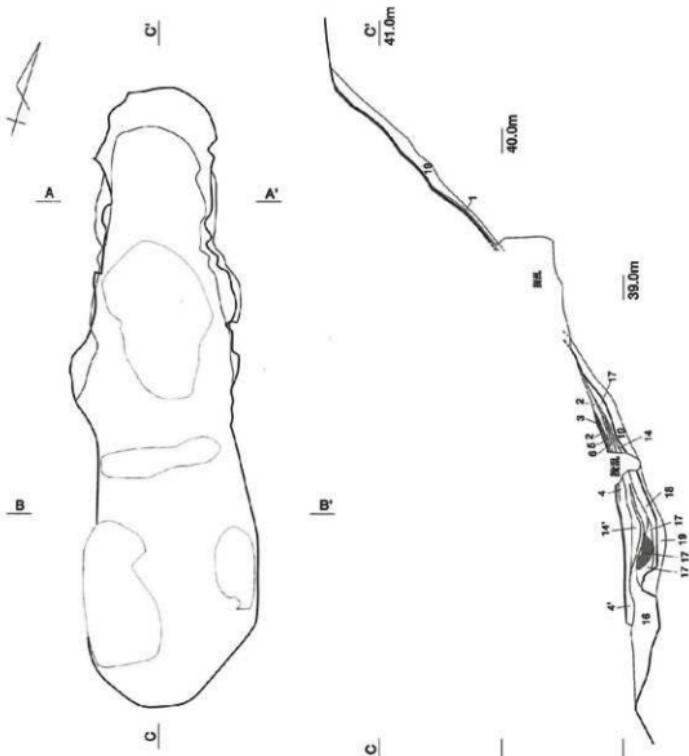
窯体(第4・5図、写真3-2)

標高39.00~41.40mの南斜面に位置する。主軸はN-17° 6'47"-Wを指し、半地下式ずんどう形の平面形を呈する。煙道部の一部と焼成室床面、前庭部を後世の擾乱により破壊されているが、比較的良好窯の平面形が残されていた。B-1号窯は、残存長5.06m、焼成室最大幅1.26m、残存壁高0.50mを測る。

窯の断面観察によると、窯体内擾乱より南側に、最大0.30mの堆積層が見られる。上層面では、窯南端から1.70m平坦な部分があり、傾斜角度20°と緩やかに擾乱まであがっている。下層面は窯南端から



第4図 B地点全体図



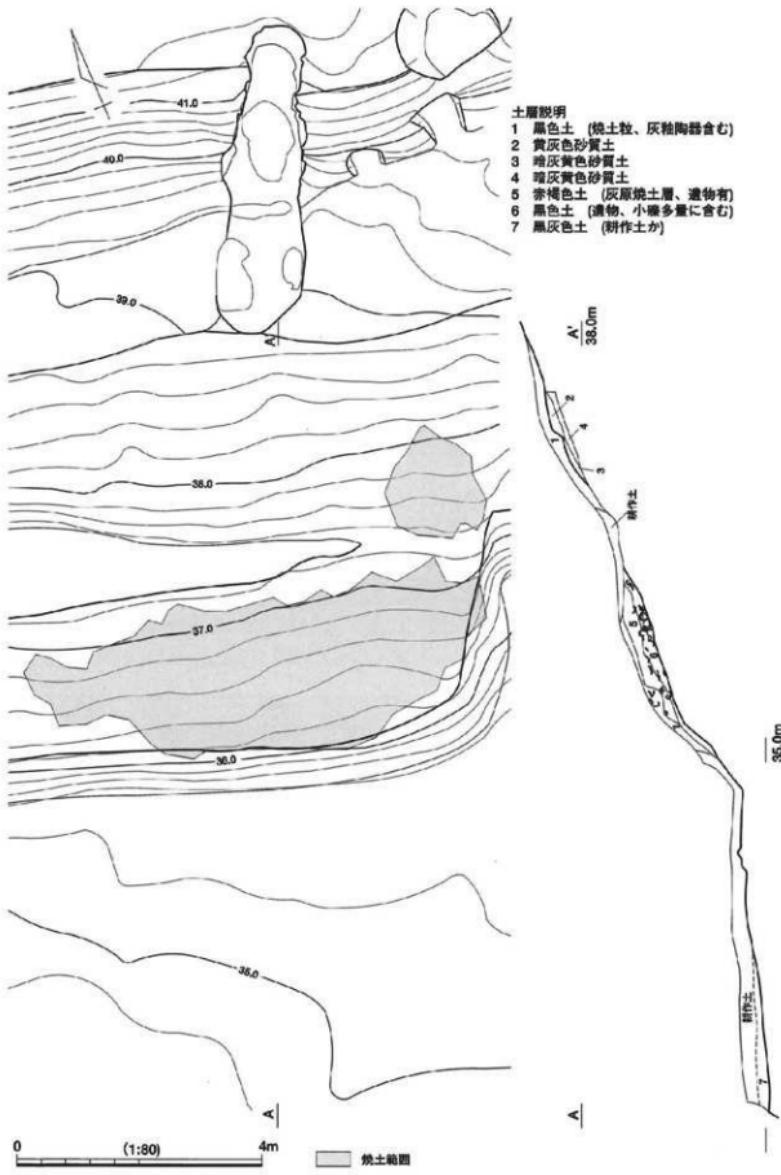
土層説明

- | | |
|---------------|-------------------------------|
| 1 淡白黄色粘質土 | 11 灰色土(溶解したスラッグ有り) |
| 2 赤色土(酸化層) | 12 赤色土 |
| 3 淡青色砂質土(還元層) | 13 黒色粘質土 |
| 4 黄色砂質土(酸化層) | 14 反黄色砂質土層(淡青色土と黄色土の互層あるいは混合) |
| 4' 黄灰色砂質土 | 14' 淡灰青色砂質土 |
| 5 灰青色砂質土 | 15 黄灰青色砂質土 |
| 6 黄色砂質土 | 16 増黒茶色土(灰と炭、焼土の混合) |
| 7 肌色土 | 17 黄色砂質土(緻密) |
| 淡灰青色土 | 18 反青色砂質土(緻密) |
| 9 肌色砂質土 | 19 赤色土(標層・酸化層) |
| 10 淡灰青色砂質土 | |

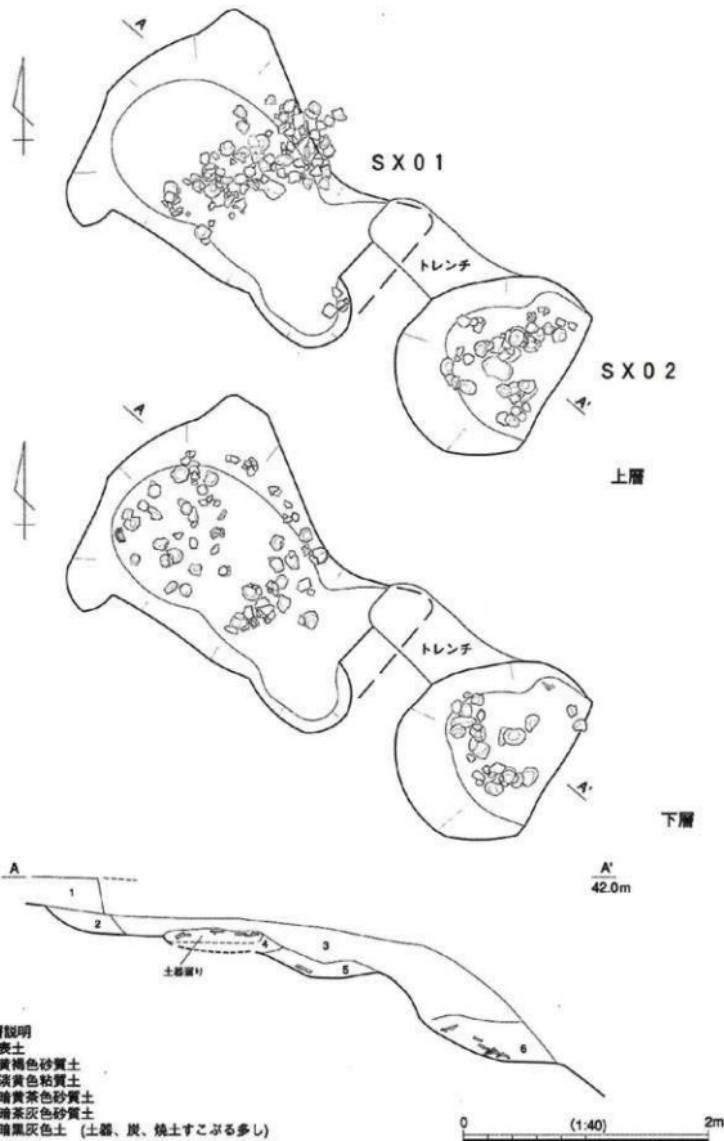
□ 搪亂

0 (1:40) 2m

第5図 B-1号窓実測図



第6図 B-1号 黒灰色原実測図



第7図 SX01・SX02実測図

0.20m落ち込み、南端から0.90mの位置に、分焰柱の残欠と思われる高まりが見られる。分焰柱の窓内幅1.30mで、分焰柱から奥に0.40mの平坦面につづき、傾斜角27°の傾斜で床面が擾乱まであがっている。擾乱より北の床面傾斜角は52°と大きくなっている。

B-1号窯は何回使用されたか不明であるが、断面では最低1回の修復を行っている模様である。修復後の焚口部、燃焼室の区画ははっきりしないが、下層面では分焰柱を境に、焚口と燃焼室に区分されていたと思われる。

灰原（第6図、写真4・5）

B-1号窯南斜面に、窓主軸方向に3.40m、横に7.50mの範囲で灰原が広がっている。斜面部は標高36.00～37.00mの位置で、やや緩やかな傾斜の中段に、0.50mと厚く灰原が堆積していた。灰原からは碗・皿・甕・窓道具等が出土している。斜面から南の平坦地は灰原の堆積層が見られず、後世の耕作により消失している。B-1号窯灰原は、斜面部も後世の耕作を受けており、現在よりも厚く堆積していたと思われる。

2) その他の遺構

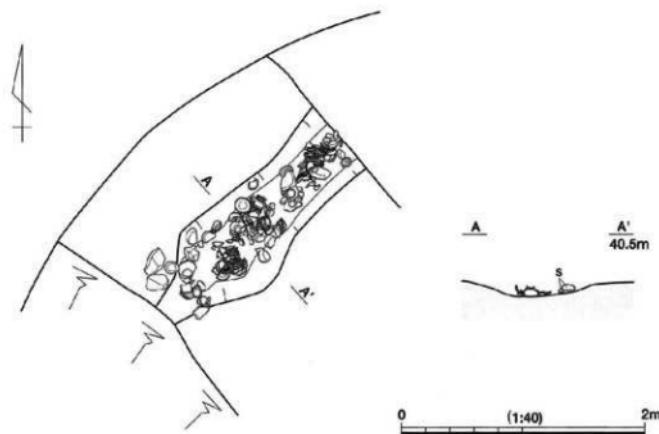
B-1号窯から東へ1.50m離れた、標高42.00～40.00mの位置にSX01、SX02、SX03が斜面に沿って確認された。

SX01（第7図、写真6-2）

SX01は標高42.00～41.40mに位置し、長軸2.40m、短軸1.70mを測る長方形の平面形を呈している。遺構内の北側にテラスを有し、南側造構立ち上がりは浅く、SX02に向かって落ち込んでいる。遺構内からは碗・陶錐等が出土している。

SX02（第7図、写真7-1）

SX02はSX01の南0.70mに位置し、遺構の南側は斜面に落ち込んでいる。遺構の全体形は不明であるが、南北軸1.50m、幅1.70mの梢円形を成していると思われる。SX02の堆積土は、炭化物を多



第8図 SX03実測図

量に含んだ暗黒色土で、灰釉陶器が多量に出土しており、B-1号窯の陶器窯りと思われる。

S X 0 3 (第8図、写真7-2)

B-1号窯の燃焼室より東側へ3.40m離れた、標高40.00mに位置する。長さ4.00m、幅1.60~1.20mの浅い溝状の平面形を呈する。遺構内からは融着した灰釉陶器が多量に出土しているが、遺構の性格は不明である。

2 遺物

概要 出土遺物はいずれの遺構も灰釉陶器を主体とする。S X 0 1、S X 0 2、S X 0 3から出土した灰釉陶器はB-1号窯で生産された製品と型式差は認められず、同時期のものと判断できる。よって、B地点において検出された4遺構は灰釉陶器生産を行ううえで有機的関連性を持った遺構群として位置付けられよう。窯体以外の遺構の評価については出土資料に融着資料や破損資料が多数見られることから、生産された製品を選別した後に失敗品を廃棄した土器捨て場として考えておきたい。

1) B-1号窯 (第9~15図)

B-1号窯は灰釉陶器窯である。出土器種は碗類(碗・深碗・輪花碗・輪花深碗・片口碗)、皿類(皿・広縁段皿)、無台碗、無台皿、高杯、瓶類(広口瓶・水瓶)、壺類(短頸壺・耳付壺・把手付壺)、鉢類(片口鉢・脚付鉢)、壺、風字硯、陶鍤、紡錘車、平瓦、また窯道具としてトチン・ツク・焼台・障焰棒が出土している。各器種の生産量については碗が多数を占めている。

窯体内床面直上からの出土ではなく、窯体内埋土から若干の遺物が見られたが、いずれも小破片であり灰原出土資料と型式差は認められないことから、以下では灰原出土資料について報告を行う。

碗 (第9~10図 1~65)

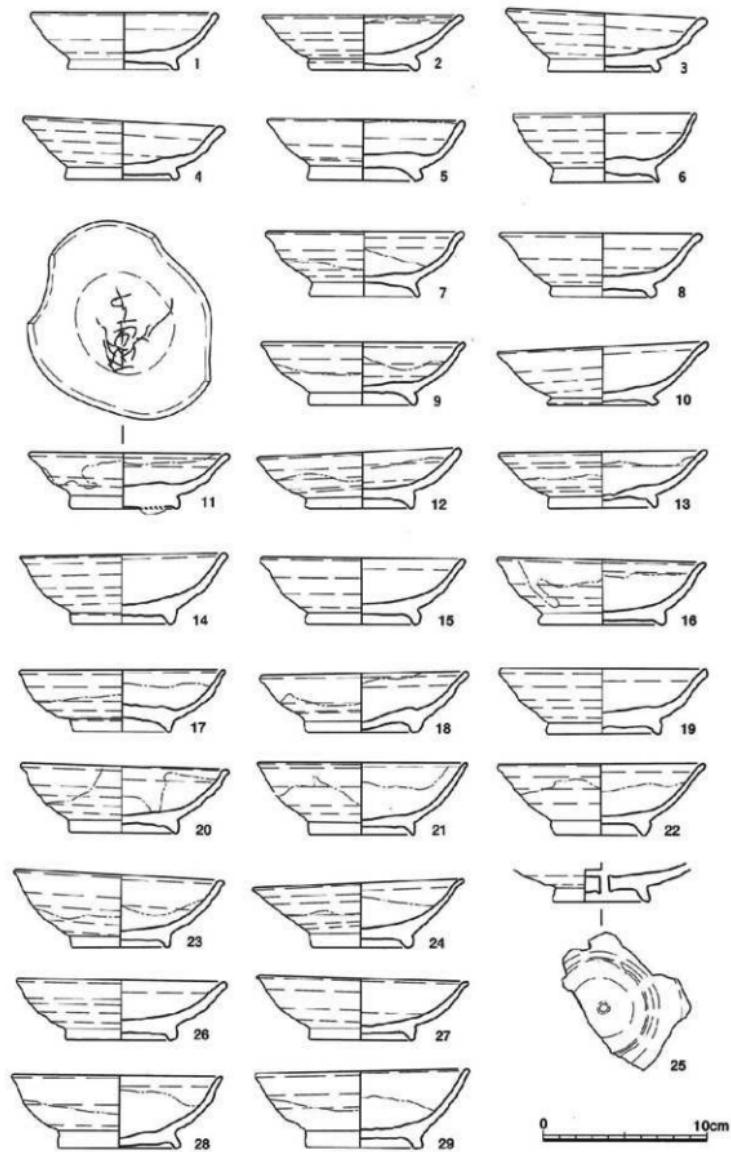
口径は11.2~15.8cmまでの幅があり、12.5~13.5cmの範囲に集中する正規分布を示す。器高は3.4~5.1cmまであり、4.0~4.5cmのものが多い。径高指数は28~35の範囲に集中する。口縁部形態については、①端部を緩やかに外反させるもの(3・4・7・9他)、②そのまま直線的に丸くおさめるもの(1・2・5・10他)、③そのまま直線的におさめ端部を平坦にするもの(14・19・20他)などが見られ、①、②がほぼ同比率で主体的となる。体部は内湾しているものと直線的なものとに分かれるが、前者が基本的である。高台部は底部と体部の境に貼り付けられており、形態については断面台形状、三角形状のものが多い。底部調整については未調整のものが大半であるが、底部中心部のみ糸切り痕を残し体部下半まで回転ヘラケズリを施すもの(51)が少数見られる。灰釉は全て漬けがけによるもので、範囲は口縁部内外面のみのものから体部下半内外面にまでいたるものがある。発色している個体の割合は約65%である。

その他、特殊資料として、底部中央に径0.5cm程度の穿孔が施されたもの(25)、内面底部に形骸化した印刻花鳥文が施されたもの(11)、網目状の線刻が施されたもの(42)がある。また、高台部底面に初期状压痕、ヘラ状压痕、ヘラ先状压痕の残るものが見られる。

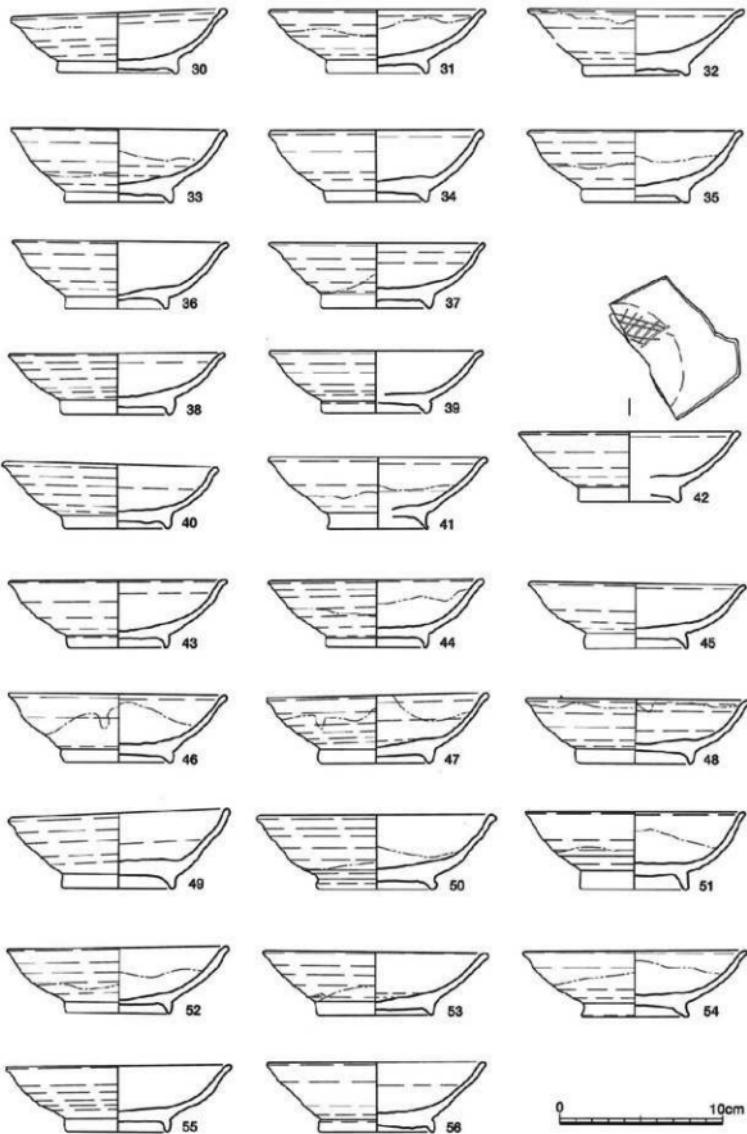
碗の焼成方法については第15図-134~136のように、直接の重ね焼きによるもので、135・136のよう同一器種で法量も近似する製品を重ねるパターンと、深碗と一回り小さい碗類を組み合わせて重ねるパターンが見られる。重ねる碗の枚数はもっと多く数えられる個体で15枚が確認された。

深碗 (第11図 66~80)

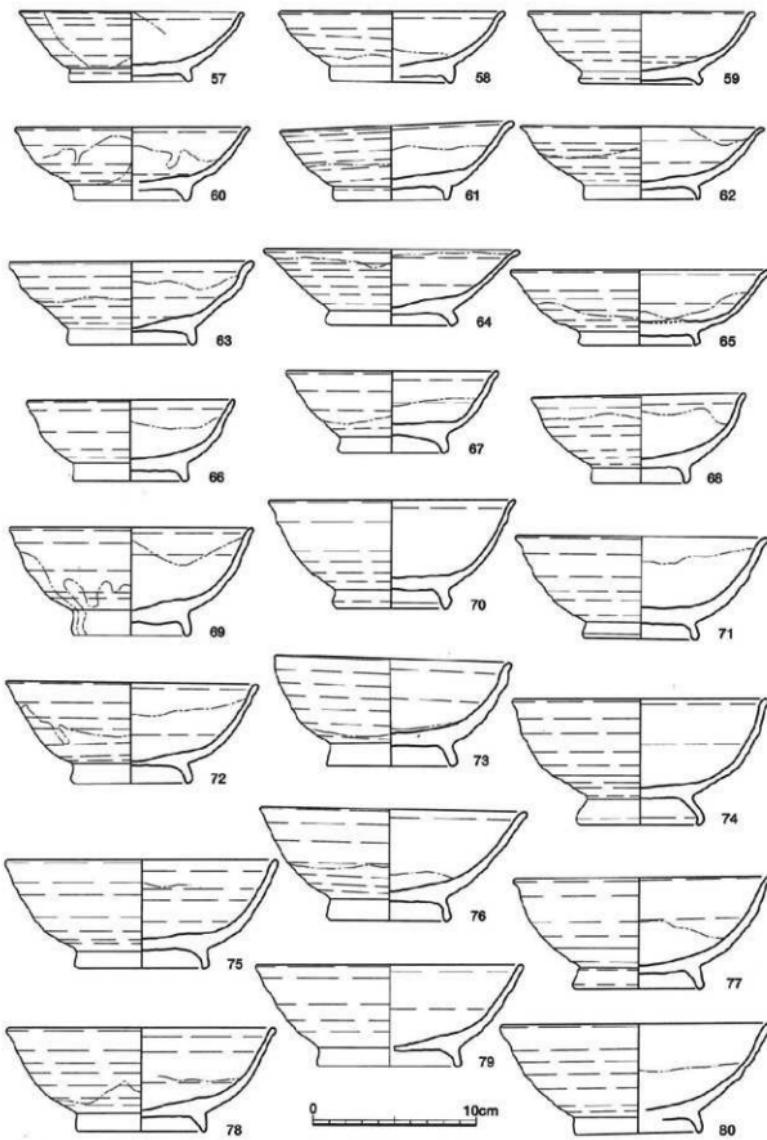
口径は12.5~16.5cmまでの幅があるが、15.0~16.0cmの大型のものが主体である。器高は5.9~7.8cmまであり、6.0cm代後半が多数である。径高指数は40前後に集中する。体部下半の腰が張り、高台もやや高いものを付している資料が多い。口縁部形態については、①端部を緩やかに外反させるもの(67・68他)、



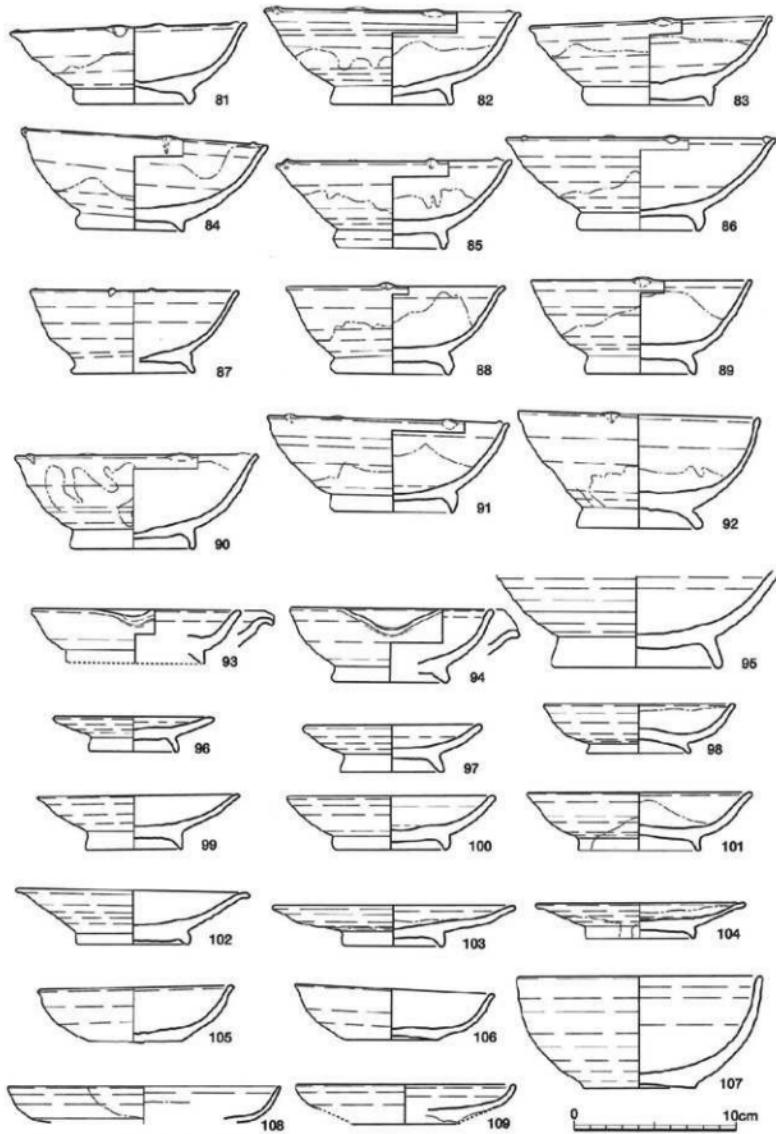
第9図 B-1号窯出土遺物(1)



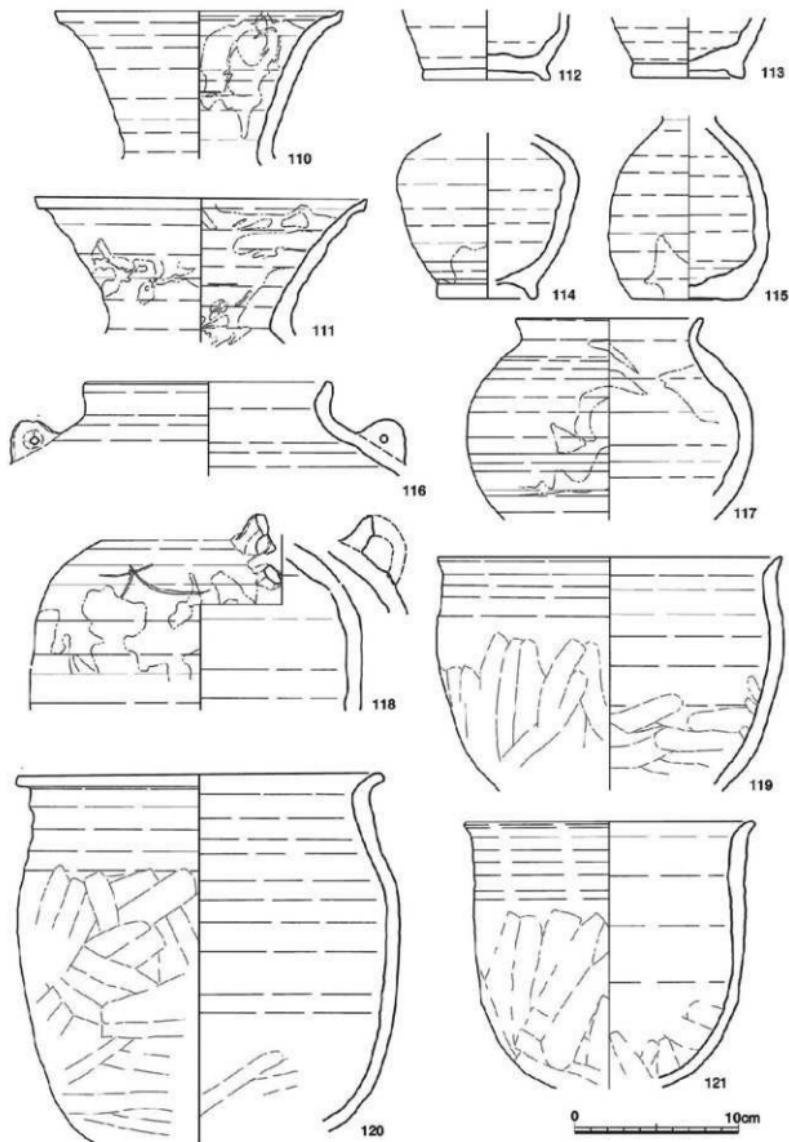
第10図 B-1号窯出土遺物（2）



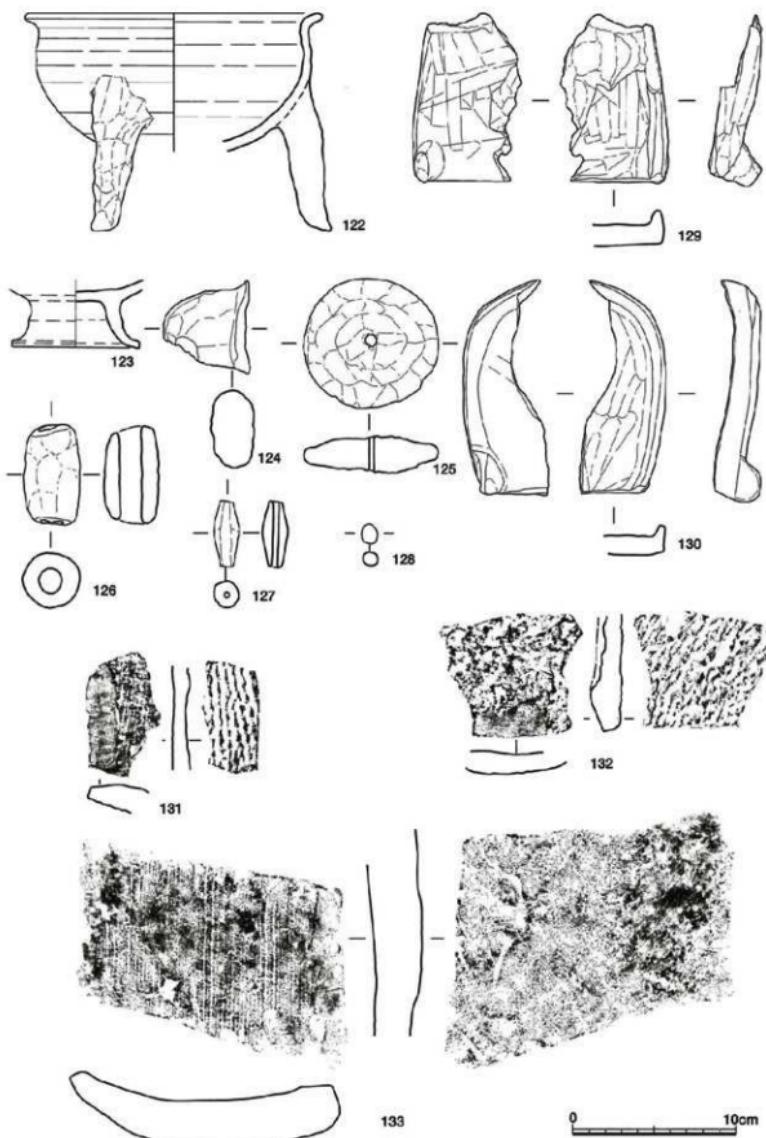
第11図 B-1号窯出土遺物(3)



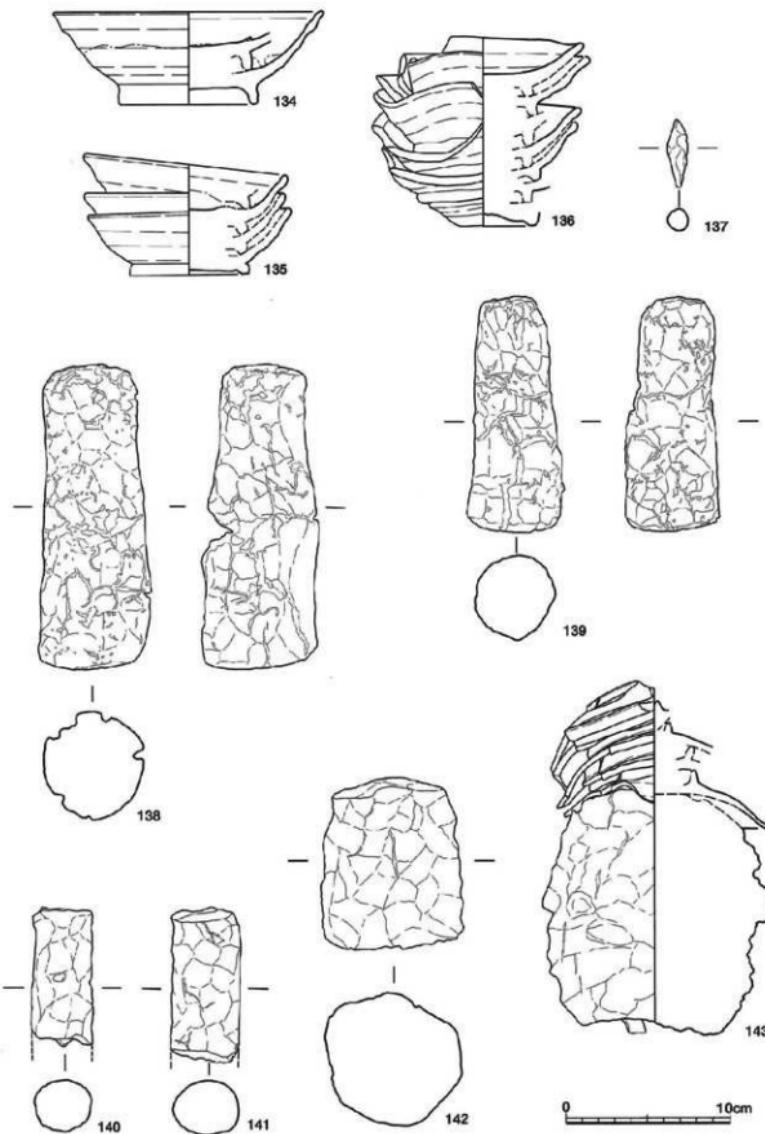
第12図 B-1号窯出土遺物(4)



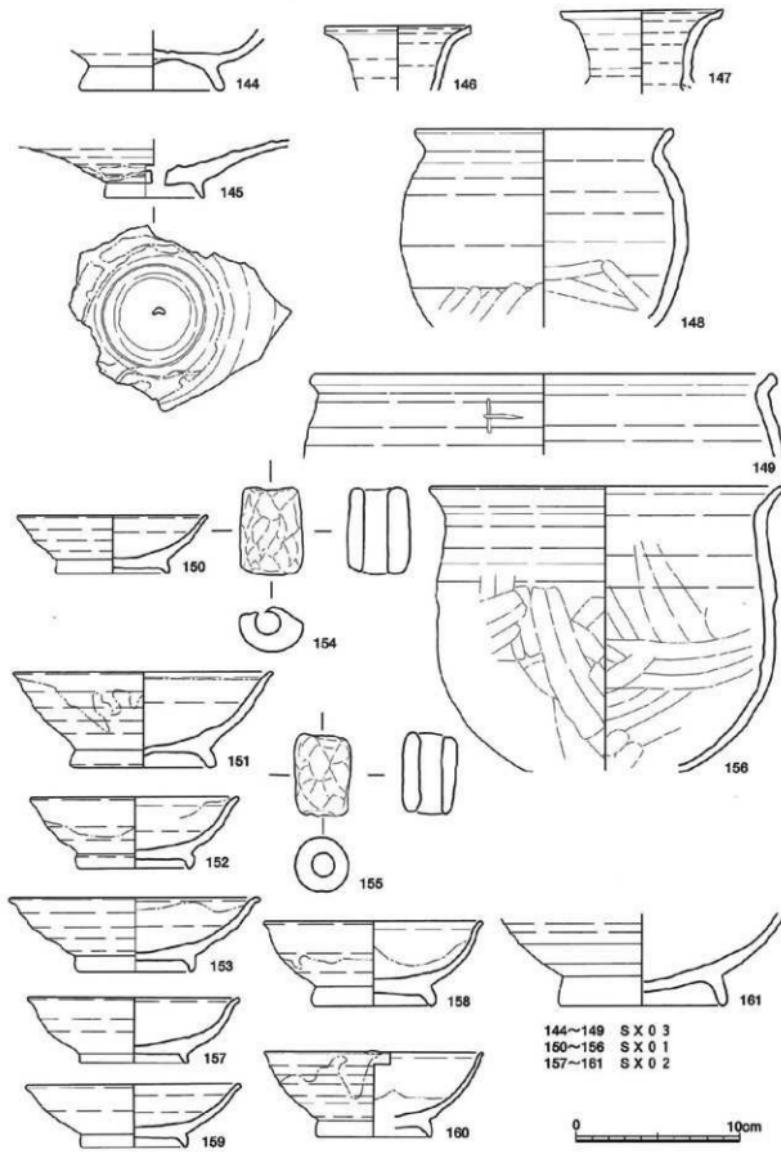
第13図 B-1号窯出土物（5）



第14図 B-1号窯出土遺物（6）



第15図 B-1号窯出土遺物(7)



第16図 B地点出土遺物

②そのまま直線的に丸くおさめるもの（66・69他）、③そのまま直線的におさめ端部を平坦にするもの（74・77他）などが見られる。高台形態は断面三角形状のものが多い。底部調整は未調整を基本とするが、底部中心部のみ糸切り痕を残し体部下半まで回転ヘラケズリを施すもの（74・77）も見られる。灰釉はすべて漬けがけであり、内外面体部半ば程度まで浸されている。

輪花碗（第12図81～86）

資料数が多くないためまとまった傾向は看取されにくいが、口径14.3～16.5cmと比較的大型の資料が多い。輪花は口縁部の外側からヘラ先状の工具で押圧する手法（81・84・85）と指により押圧する手法（82・83・86）とに分けられる。全て4輪花に復元される。

輪花深碗（第12図87～92）

口径12.8～13.4cmの中型のものと、14.8～14.9cmの大型に近いものとに大別される。輪花碗と同様に輪花手法には2種類あり、全て4輪花に復元される。

片口碗（第12図 93・94）

口縁部の1ヶ所を内側から指により押圧し、片口流部を作り出したものである。2個体とも口径は12.0cm半ばであるが、深さにより浅いもの（93）と深いもの（94）とに分かれる。両方とも灰釉は施されていない。

皿（第12図 96～103）

口径9.8～14.8cm、器高2.2～3.6cm、径高指数16.9～27.4と法量的にばらつきが認められる。口縁部形態については、①端部を緩やかに外反させるもの（102）、②そのまま直線的に丸くおさめるもの（96・97他）が見られる。体部は緩やかに内湾するもの（97・99・100）、腰部の張るもの（98・101）、直線的なもの（96・102・103）がある。高台形態は断面台形状、三角形状のものが多い。底部はいずれも未調整である。灰釉は漬けがけによるものであるが、無釉の製品が目立つ。

広縁盤皿（第12図 104）

皿の内面体部と底部の境付近に一条の沈線をめぐらし段を形成している。復元口径13.0cm、器高2.2cm、径高指数16.9である。体部は直線的に開き、口縁端部がわずかに外反する。高台は断面三角形状である。灰釉は内外面体部半ばまで漬けがけされる。

無台碗（第12図 105～107）

高台を持たない碗で、器形から碗タイプのもの（105・106）と深碗タイプのもの（107）がある。105は口径11.3cm、器高3.6cm、106は口径12.3cm、器高3.1cm、107は口径15.0cm、器高7.0cmを測る。105・106は内湾した体部から口縁端部をやや外反させ、107は内湾した体部からそのまま直線的に口縁端部を丸くおさめている。いずれも灰釉は施されていない。

無台皿（第12図 108・109）

底部が欠損もしくは剥離していることから明確に無台皿とは断定できないが、その可能性が高い資料として報告する。108は口径18.6cm、109は口径14.6cmを測る。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部を108ではそのまま直線的にのばして端部をやや尖り気味に丸くおさめ、109ではやや内湾気味にのばして端部を丸くおさめている。108では灰釉が一部漬けがけされている。

広口瓶（第13図 110～114）

頸部から口縁部にかけて大きく外反する瓶である。全形の判明する資料はないが、残存部の大きさから大型のもの（110・111）と小型のもの（112～114）に分かれるようである。頸部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端部を上方につまみ上げて尖り気味におさめるもの（110）と、そのまま尖り気味におさめるもの（111）とがある。肩部は肩が張り、徐々にすぼまりながら底部に至る。高台は断面台形状

のものが付けられる。調整は底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリを施すもの（114）と未調整のもの（112・113）がある。灰釉は口縁部から頸部にかけて刷毛塗りによって施される。

水瓶（第13図 115）

頸部から口縁部の形状は不明であるが、胴部は中央部で最大径となり頸部にむかってすぼまっていく形状で、高台は付さない。底部にも回転ナデが施され、糸切り痕が消されている。

短頸壺（第13図 117）

復元口径11.2cm、胴部最大径17.6cmに復元される。胴部中央に最大径をもつ球形の胴部に、短い口縁部が外方にむかって伸びる。口縁端部は丸くおさめる。底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリがなされている。灰釉は刷毛塗りによって胴部下半まで施されている。

耳付壺（第13図 116）

肩部に断面三角形状で中央に穿孔が施された耳を付したものである。耳は残存部で1ヶ所しか確認されず、個数については不明である。壺の形状は短頸壺であり、肩部は張らずに口縁部に向かってすぼまり、口縁部はやや外方に広がりながら端部を平らにしておさめている。

把手付壺（第13図 118）

肩部に1ヶ所、粘土紐を環状に付して把手としたものである。口縁部及び胴部下半以下は欠損しているため不明である。肩部には「大」の文字がヘラ状工具によって刻まれている。灰釉は肩部の範囲まで刷毛塗りによって施されている。

甌（第13図 119～121）

口径17.6cmのやや小型のもの（121）から口径22.1cmの大型のもの（120）がある。丸底の底部から胴部に向かって徐々に広がり胴部のやや上よりで最大径となり、口縁部に向かって徐々にすぼまる形態（119・120）と、胴部が直線的に開いていく形態（121）とがある。口縁部は外方に向かってのび、端部を丸くおさめるもの（120）と尖り気味におさめるもの（119・121）とがある。成形はヨコナデによって行われるが、ヨコナデ後、外面底部から胴部最大径の範囲にかけて静止ヘラケズリが施される。底部付近では横方向、胴部では縦方向を基調としている。また、内面についても底部付近では横方向もしくは斜め方向のユビナデが施されている。胎土には粒径1.0cm以下の砾が多量に含まれており、混和材として意図的に混入したものと思われる。

片口鉢（第12図 95）

口縁部が欠損しているため、片口鉢としては認識できないが、通常の碗類よりもひとまわり大ぶりであることからその可能性が高いものとして報告する。高台径は10.2cm、残存高は5.7cmを測る。底部中心部に糸切り痕を残して、底部から体部下半の範囲に回転ヘラケズリを施す。

脚付鉢（第14図 122）

口径17.6cm、器高13.5cmを測る。鉢は半球形の胴部から口縁部が外方にむかってのびて端部を丸くおさめる形のものである。胴部のやや下よりから脚を付している。脚は、長さ約9.5cmを測り、ユビナデ、およびユビオサエにより成形されている。

高坏（第14図 123）

脚部のみの出土である。脚部径7.8cm、高さ3.6cmを測る。碗部の底部外面に糸切り痕が認められるところから、碗部と脚部を各々成形後接合したものと考えられる。脚部はハの字状に広がりながら端部に至り、端部には平坦面を形成している。

風字硯（第14図 129・130）

129は残存長10.3cm、最大幅6.3cm、高さ3.5cmを測る。脚部は台形状を呈している。器面全体はヘラ

状工具によるナデが施されている。130は残存長13.1cm、最大幅4.7cm、高さ4.1cmを測る。脚部は円形状を呈している。器面全体にはユビナデが施されている。

紡錘車（第14図 125）

径7.9~8.3cm、高さ2.2cm、孔径0.8cmを測る。器面全体はユビナデ、ユビオサエによって整えられている。

陶錐（第14図 126・127）

陶錐は大小2種類のものが見られる。126は長さ6.2cm、最大径3.5cm、重量約50gを測る大型のもので、形状は寸同の円筒形である。色調は浅黄橙色を呈し、還元化されていない。127は長さ4.0cm、最大径1.5cm、重量約5gを測る小型のもので、中央部にむかってふくらみを持つ棗玉状を呈す。色調は灰褐色で、還元化されている。いずれもユビナデ、ユビオサエによって成形されている。

陶丸（第14図 128）

粘土を小さく球状に丸めたものである。最大径1.2cm、最小径0.85cmを測り、断面形状はやや楕円形となる。

瓦（第14図 131~133）

平瓦が数点出土している。凹面は131でやや粗い布目痕が認められ、凸面は131・132で繩目叩きが、133ではユビナデが施されている。また端縁および側縁はヘラケズリがなされている。

トチン（第15図 137）

トチンは1点のみ認められた。中央部に最大径を持ち、両端が細くなる棒状を呈し、長さ4.2cm、最大径1.3cmを測る。ユビナデ、ユビオサエによって成形している。

ツク（第15図 138~142）

ツクは3種類の異なる形状のものが認められた。138・139は上端に向かって徐々に細くなっていくもので、138は長さ18.8cm、最大径7.1cm、139は長さ14.6cm、最大径5.8cmを測る。142は同様の形状ではあるが、一回り太く低いもので、長さ10.4cm、最大径8.0cmを測る。140・141は全形が不明ではあるが、寸同形の棒状になると思われるもので、140は残存長8.2cm、径3.4cm、141は残存長8.8cm、径4.0cmを測る。

障焰棒（第15図 143）

高さ約15.0cm、幅約14.0cmを測る直方体状の粘土塊に、碗が伏せた状態で5枚融着している。粘土塊と碗を合わせた高さは約22.0cmである。粘土塊は底面が平坦となっており、側面には指頭圧痕が複数箇所認められる。灰色から黒色を呈し、被熱による硬化が顯著である。碗は上の2枚が下段のものとずれた状態で重なっており、また碗と碗との隙間には粘土塊へと繋がるように粘土が充填されている部分も見られる。碗全体には自然釉の付着が著しく、欠損した割れ口部分にも自然釉が認められる。以上の点から、碗は重ね焼きの失敗品を転用したもので、粘土塊と碗は意図的に一体化されたものと考えられる。また、この資料は窯体内において傾斜の緩い位置に置かれて複数回使用された窯道具の一種であろうと推測される。

こうした窯道具としては、焼成室の温度を均一化させる機能を持つ「障焰棒」が可能性としてあげられる。

2) SXO1（第16図 150~156）

150・151・154はSXO1の埋土上層から、152・153・155は埋土下層から出土した資料である。156の甕は上層と下層とで接合関係にあった。上層、下層とにおいて、またB-1号窯灰原資料との間におい

て型式的差異は認められず時期差はそれほどないものと見て良い。

3) SX 02 (第16図 157~161)

157・158はSX 02の埋土上層から、159~161は埋土下層から出土した資料である。161は片口鉢であると思われる。SX 02出土資料も埋土上層、下層、B-1号窯灰原間において型式的差異は認められず時期差はそれほどないものと見て良い。

4) SX 03 (第16図 144~149)

SX 03から出土する製品には、破損資料や融着資料、焼き歪み、焼き彫れ資料が目立つ。主要な製品(144・148)の特徴は灰原出土資料と同様であるため、灰原では認められなかった資料について報告を行う。

皿 (第16図 145)

体部から口縁部にかけてやや外反ぎみに大きく開いていく形状のもので、底部中心には径約0.8cmの円孔が穿たれている。灰釉は刷毛塗りによって施されている。

広口瓶 (第16図 146・147)

灰原出土資料で見られた広口瓶の小型のものに属す。146は口径9.0cm、147は口径10.0cmを測る。

壺 (第16図 149)

口径28.0cmを測る大型の壺で、口縁部直下の位置に線刻が施されている。

第3節 C地点の遺構と遺物

1 遺構

逆L字状に南面と東面の斜面がつく地形で、南斜面から2基の須恵器窯と、土器窯りと思われる遺構が確認された。東側斜面からは遺構は確認されず、窯は存在しなかった模様である。

1) C-1号窯

窯体 (第18・19図、写真9)

標高45.20~43.20mに位置する。主軸はN-5° 55' 57"-Wを指し、焼成室の一部が残る半地下式の窯である。残存焼成室の長さ3.70m、床面幅1.70m、残存壁高0.57mを測る。煙道部・燃焼室・前庭部は、後世の搅乱により破壊されているが、焼成室南端より南へ0.80mの位置から、床面の残欠と思われる青灰色土が確認された。

窯の断面観察によると、残存窯体南端から1.70mまで窯床の補修をしている。残存窯体南端から1.20mまでは厚く粘土を貼り付けており、埋土8層からは窯体内埋土下層の遺物が出土している。窯体内のかき出しづをそのまま使用している模様である。初回の窯床面傾斜角は29°、最終回はやや傾斜がゆるくなり24°となる。補修された床面から上の焼成室床面の傾斜角は32°となっている。

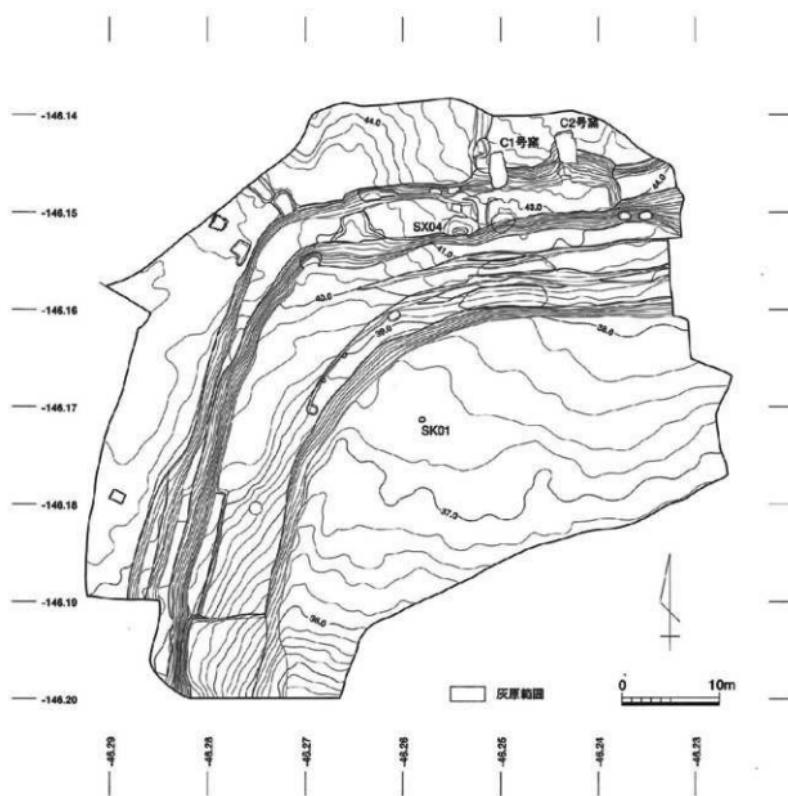
灰原 (第17図)

窯跡より下段の斜面に、灰原の残存と思われる焼土跡がみられたが、灰原として確定はできなかった。灰原と思われる範囲からは、須恵器類に混じって灰釉陶器が出土している。窯の確認は出来なかつたが、須恵器窯の付近に灰釉陶器を焼いた窯があったものと思われる。

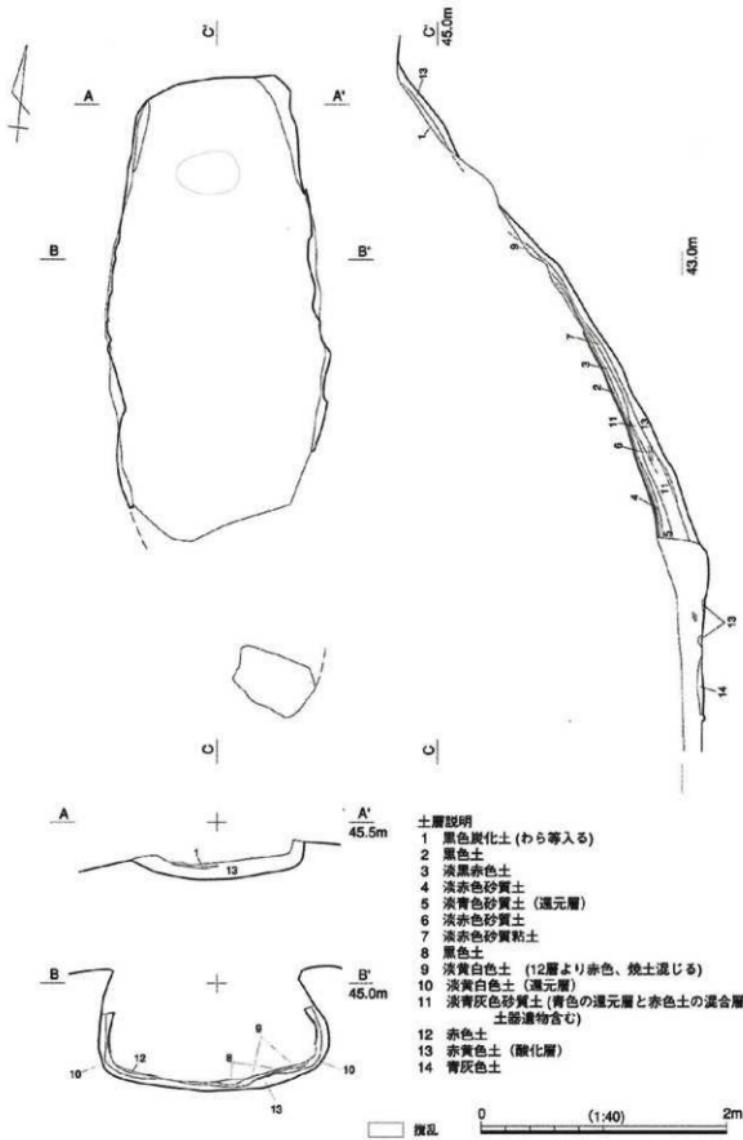
2) C—2号窯

窯体（第20図、写真10）

標高45.80～44.60mに位置する。前庭部は後世の搅乱により破壊されているが、長さ3.30m、幅2.05m、残存壁高0.45mを測る、長方形の平面形を呈している。主軸はN-11°-Wを指し、焼成室床面の傾斜角は10°となだらかな傾斜をなしている。煙道部は、焼成室南端から3.80mの位置で垂直に立ち上がり、床面から0.60m上がった位置に、奥行き0.20mの段を有する。窯体上部は破壊を受け、煙道部立ち上がりの高さは不明であるが、数段の段があった模様である。窯の断面観察によると、床面は厚いところで0.16mの厚みがあるが、1枚と思われる。窯体内からは、須恵器片が出土した。



第17図 C地点全体図



第18図 C-1号窯実測図

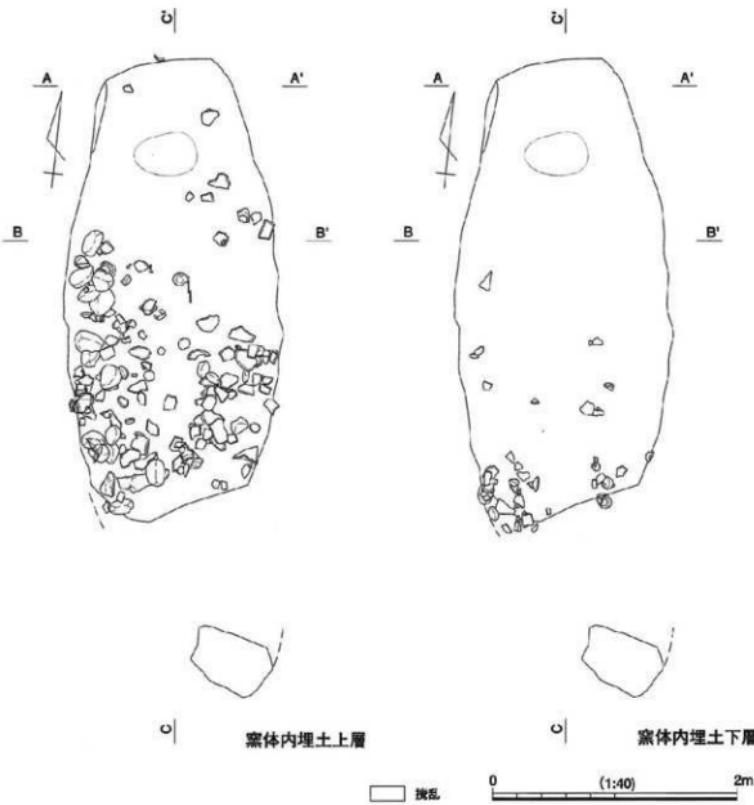
3) その他の遺構

S X 0 4 (第21図、写真11-1)

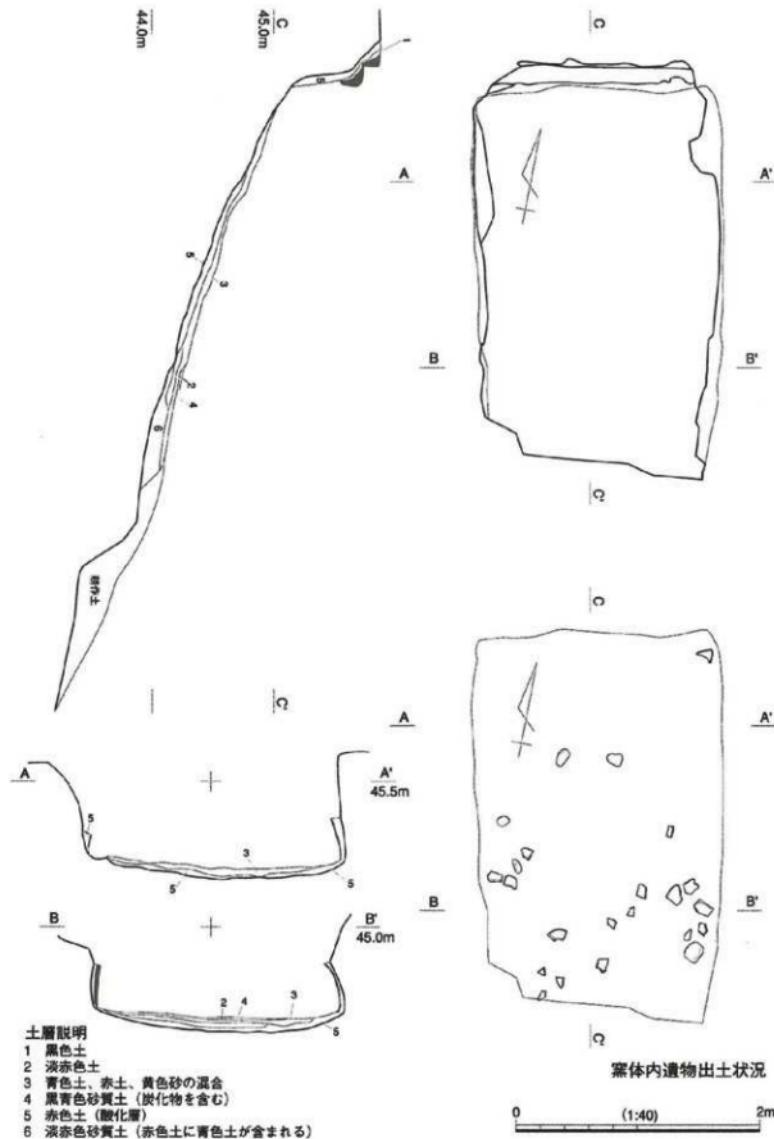
C-1号窯から南へ2.50m離れた中段で確認された。南側を搅乱で破壊され、遺構の形状は不明である。遺構の規模は、長軸3.65m、短軸2.00mを測り、橢円形又は円形の平面形を呈していたと思われる。遺構内からは灰釉陶器が出土している。遺物は浅い位置から出土しているため、土器溜りとして確定できなかった。C-1号窯・C-2号窯とも須恵器窯であるため、S X 0 4に関連する灰釉の窯がC地点付近にあったものと思われる。

S K 0 1 (第21図、写真11-2)

C地点南の平坦地に、工房跡の痕跡を確認するため調査した。工房跡となる遺構は確認できず、長軸0.60m、短軸0.45mのpit状遺構のみが確認された。遺構内の埋土には、多量の焼土塊や炭化物が含まれていた。遺構内からは生焼けの土器が出土しているが、遺構の性格は確定できなかった。



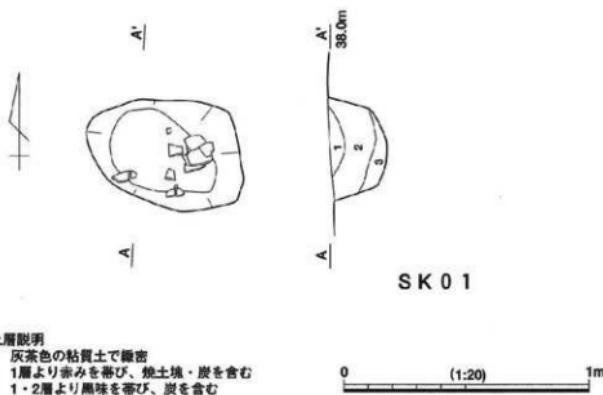
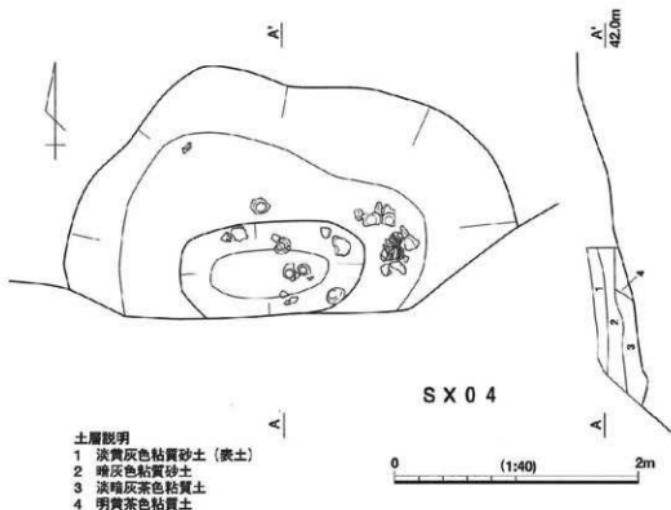
第19図 C-1号窯窯体内遺物出土状況図



第20図 C-2号墓実測図

4) 石垣遺構 (写真15)

C地点とD地点の間となる南斜面部に、東西約13段、南北約5段に石が積まれたT字状の石垣遺構が確認された。遺構からは遺物が出土しなかったため、遺構の時期は確定できなかった。



第21図 SX 04・SK 01 実測図

2 遺物

概要 C-1号窯、C-2号窯からは須恵器が、SK01からは生焼けの土器が、SX04からは灰釉陶器が出土している。SK01から出土した土器については摩滅した小破片であり、図化及び時期の特定は不可能であった。

1) C-1号窯 (第22・23図)

須恵器が窯体内埋土及び灰原から出土している。窯体内埋土から出土した器種は蓋坏、有蓋高坏?、無蓋高坏、提瓶?、器台、鉢、甕、灰原から出土した器種は蓋坏、高杯、壺、提瓶、甕?、壺(穂?)、甕である。窯体内資料と灰原資料とに型式差は見られない。

窯体内埋土上層出土資料

坏蓋 (第22図 1・2・4・5)

口径11.0~13.6cm、器高3.4~4.2cmに復元されるが、焼き垂みおよび残存率の低さから正確性にはやや欠ける。形態には天井部の高さが高いものと(1・2)と、低く扁平なもの(4・5)がある。天井部と口縁部の境は沈線を施することで稜をつくりだし区別している。口縁部はやや内湾ぎみに下がり、端部はそのまま丸くおさめる。成形は回転ナデを基本とし、天井部には全体の1/5~1/3の範囲にかけて回転ヘラケズリ調整を施す。また、未調整のものもわずかに含む。成形および調整時におけるロクロの回転方向はいずれも左回りである。

坏身 (第22図 3)

小破片がわずかに出土している。残存高は3.0cmである。直線的な体部から断面三角形状の受け部に至り、たちあがりは外湾しながら内傾し、端部をそのまま丸くおさめる。体部には回転ヘラケズリ調整を施す。

無蓋高坏 (第22図 6)

坏部は復元口径12.8cm、器高4.8cmを測る。全体の残存高は6.3cmである。体部は内湾しながらちあがり、そのまま口縁部へと至る。口縁端部は内側に浅い凹面を形成している。口縁部と体部の境には浅い一条の沈線がめぐる。成形は回転ナデにより、底部の調整については自然釉の付着のため観察できない。脚部は基部が6.2cmと太く、残存部では八の字状に開いている。

甕 (第22図 7・8)

7は復元口径14.0cm、口頸部高4.7cmを測る。頸部の内面は外湾しながら、外面は中央部および口縁部境で肥厚しながら開く。口縁端部は水平方向に挽き出し、先端を尖りぎみにおさめる。体部には縱方向の叩きを施し、内面は縱方向のユビナデがなされている。8は復元口径14.0cm、口頸部高4.3cm、残存高10.7cmを測る。頸部はやや外湾しながら開き、頸部と口縁部の境には稜がつくり出されている。口縁端部は平坦面を形成している。体部はやや肩の張る形状のもので外面には横方向の叩きが、内面には縱方向のユビナデが施されている。

提瓶 (第22図 9)

口縁部から頸部のみの出土である。平瓶の可能性もある。復元口径10.0cm、口頸部高6.5cmを測る。頸部は外湾しながら開いて口縁部に至り、口縁端部は丸くおさめる。頸部外面には浅い2条の沈線が施されている。わずかに残る体部の頸部近くには2条の沈線が認められる。成形は回転ナデを基本とする。

器台 (第22図 10)

器台の脚部が出土している。脚部のうちでも基部に近い部分であると思われる。復元最小径13.2cm、復元最大径15.6cm、残存高7.5cmを測る。外面には3条沈線2条突帯を1単位とする区画が2ヶ所なさ

れ、区画間には波状文が施されている。成形は回転ナデによる。

こね鉢（第22図 11）

復元口径15.8cm、器高14.6cm、底部径13.2cmを測るが、焼き歪みが大きく正確性には欠ける。体部は逆ハの字状に開き口縁端部には平坦面を形成する。外面には2条沈線1条突帯を1単位とする区画が2ヶ所なされ、区画間には波状文が施されている。底部には外面から幅約5mmの穿孔がなされているが、内面にまでは貫通していない。成形は回転ナデを基本とする。

焼台（第22図 12）

粘土を瓜形状に固めたものである。30は残存幅横16.7cm、縦11.0cm、高さ12.2cmを測る。上面に円形の突起部が残存している。焼台はいずれも黄橙色を呈し、還元化されていない。

窯体内埋土下層出土資料

坏身（第22図 13）

復元口径12.0cm、残存高3.5cmを測る。やや内湾した体部から断面三角形状の受け部に至り、たちあがり部は内傾しながら端部をやや肥厚させて丸くおさめる。体部の1/2の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。

有蓋高窯（第22図 14）

底部が残存していないため、高窯と断定することはできない。器形にその可能性があるものとして報告する。復元口径は18.8cmとなるが、残存率が約1/8と低く正確性にはやや欠ける。残存高は2.8cmを測り浅い。やや内湾した体部から断面三角形状の受け部に至り、たちあがり部は内傾しながら端部をやや肥厚させて丸くおさめる。底部には回転ヘラケズリ調整を施している。

灰原出土資料

坏蓋（第23図 15～19）

天井部と口縁部の境を稜によって区分する15と、両者の区分をしない16～19の2種類の器形が認められる。15は復元口径10.6cm、器高3.4cmを測る。平坦な天井部から内湾しながら口縁部へと至り、口縁端部は丸くおさめる。成形は回転ナデにより、天井部には回転ヘラケズリ調整が施されている。また天井部に「-」状のヘラ記号が見られる。16は復元口径10.4cm、17は11.8cm、18は復元口径11.8cm、器高4.6cm、19は13.2cmを測る。天井部はややふくらみを持ち、体部は内湾しながら下降しそのまま口縁端部へといたる。口縁端部はそのまま丸くおさめる。成形は回転ナデによって行い、天井部には回転ヘラケズリ調整を施す。成形および調整時におけるロクロの回転方向は左回りである。

坏身（第23図 20～28）

口径9.0～9.8cm、残存高3.5～4.0cmを測る。体部は直線的なもの（20・23・28）と内湾するもの（21・22・27）がある。受け部はいずれも断面三角形状である。たちあがりはやや外湾しながら内傾し、端部は丸くおさめるもの（23～25）、平坦面を形成するもの（20・26）、肥厚させて内面に面をもつもの（21・22・28）、やや尖りぎみにおさめるもの（27）が見られる。成形は回転ナデによって行い、底部は全体の1/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。成形、調整時のロクロの回転方向は左回りである。

高窯（第23図 29～31）

脚部の破片が出土している。ハの字状に開いていく形態で、底部に向かって大きく開いていく境ににぶい稜を形成している。底端部は30では下方につまみだして尖りぎみにおさめ、31では若干の丸みを持つ平坦面状で内端で接地する。長方形の透かしを2段、2方向に施している。成形は内外面回転ナデによる。30は復元底部径8.8cm、31は10.0cmを測る。

提瓶（第23図 32・33）

32は提瓶、33は提瓶もしくは瓶の把手部であろうと思われる。33はナデおよびヘラケズリにより成形

されている。断面円形の鉤の手状に復元されるものと思われる。33は回転ナデにより、貼付け、成形がなされている。体部には縦および斜め方向の叩きが施されている。

壺 (第23図 36・37)

復元口径12.0cm、残存高6.6cmを測る小型のもの(36)と、復元口径18.0cm、残存高6.1cmの大型のもの(37)がある。体部は中心に最大径をもち、口縁部は直線的に内傾し、端部を36では平坦に37では丸くおさめる。成形は回転ナデを基本とし、調整は36では底部から体部下半までの範囲に回転ヘラケズリを行い、さらに底部の平坦面には一定方向のケズリが施されており、37では体部下半に縦方向および横方向に近い斜め方向のタタキを施している。

壺 (第23図 34)

壺の口頸部であるが、刺突文を施すことで装飾性を持たしていることから壺であると推定した。頸部は逆ハの字状に開き、口縁部との境には断面台形状の低い突帯をつくりだしている。口縁端部は浅い凹面をなしている。頸部は櫛描列点文を羽状にめぐらしている。2条の列点文の境にはわずかな突線がつくりだされている。成形は回転ナデによる。

壺 (第23図 35・38)

口頸部および体部が出土している。35は復元口径17.6cm、口頸部高3.7cmを測る。頸部は直線的に外上方へ開き、口縁部でやや内湾する。口縁端部は平坦面を形成する。38の体部には、外面に左上がりの斜めの粗い叩きと上方にはヨコナデが、内面にはユビナデおよびユビオサエが見られる。

2) C-2号窯 (第24図 39~45)

窯体内からは須恵器壺の体部破片のみが出土している。よって、時期や生産器種など不明な点が多い。参考資料としてC-2号窯付近の表土から出土した資料を合わせて提示するが、C-2号窯に伴うものであるかは不明である。

壺 (第24図 39~43)

窯体内からは体部破片が出土している。いずれも外面には縦方向の叩き、内面にはユビナデが見られる。42・43は付近表土より出土した壺の口頸部である。43の叩き目は窯体内のものと類似する。42は口径24.0cm、43は23.6cmを測る。頸部半ばには2条の浅い凹線により低い突帯をつくりだし、頸部と口縁部の境には段を形成している。口縁端部はやや上方につまみだし、端部を尖りぎみにおさめている。

壺蓋 (第24図 44・45)

C-2号窯の表土より出土している。小破片であるため器種の断定には至らない。45では天井部側と思われる部分に回転ヘラケズリ調整が見られる。

3) SX04 (第24図 46~49)

碗 (第24図 46・47)

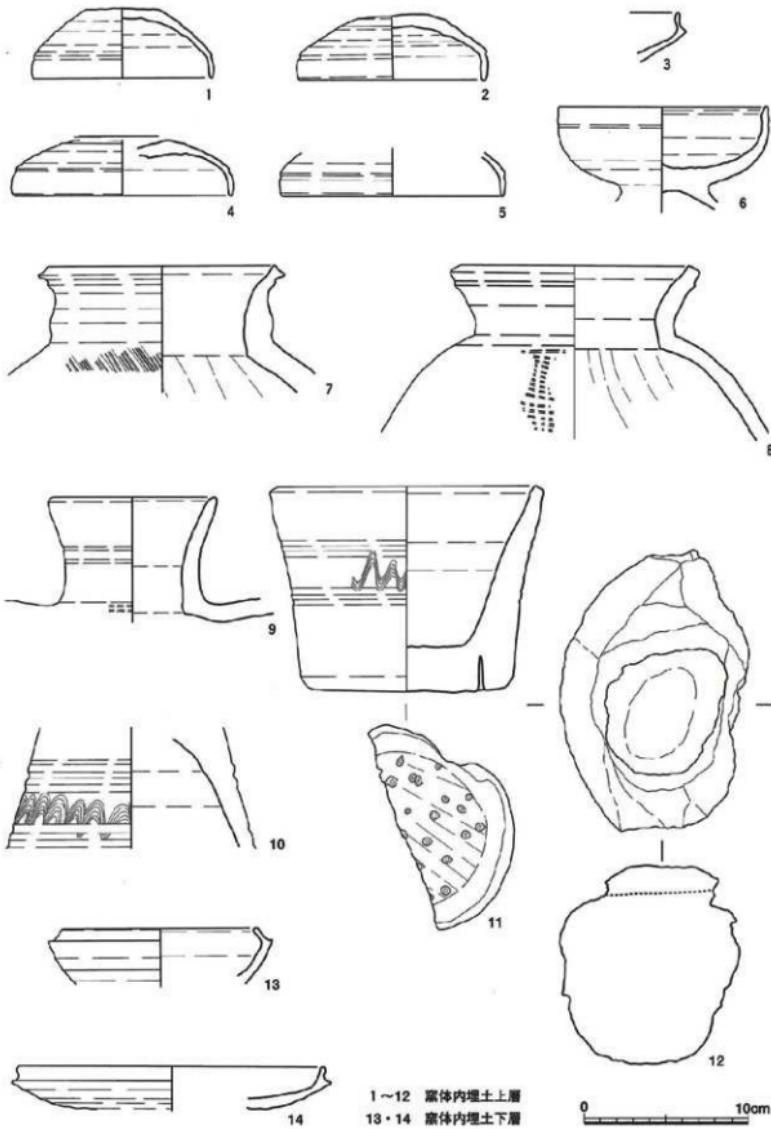
46は口径12.0cm、器高3.5cm、47は口径12.4cm、器高3.4cmを測る。内湾した体部から口縁部に至り、端部はそのまま丸くおさめる。底部は未調整である。灰釉は認められない。

深碗 (第24図 48・49)

48は口径14.4cm、器高6.0cmを測る。48・49ともに底部は未調整である。灰釉は施されていない。

4) その他 (第24図 50)

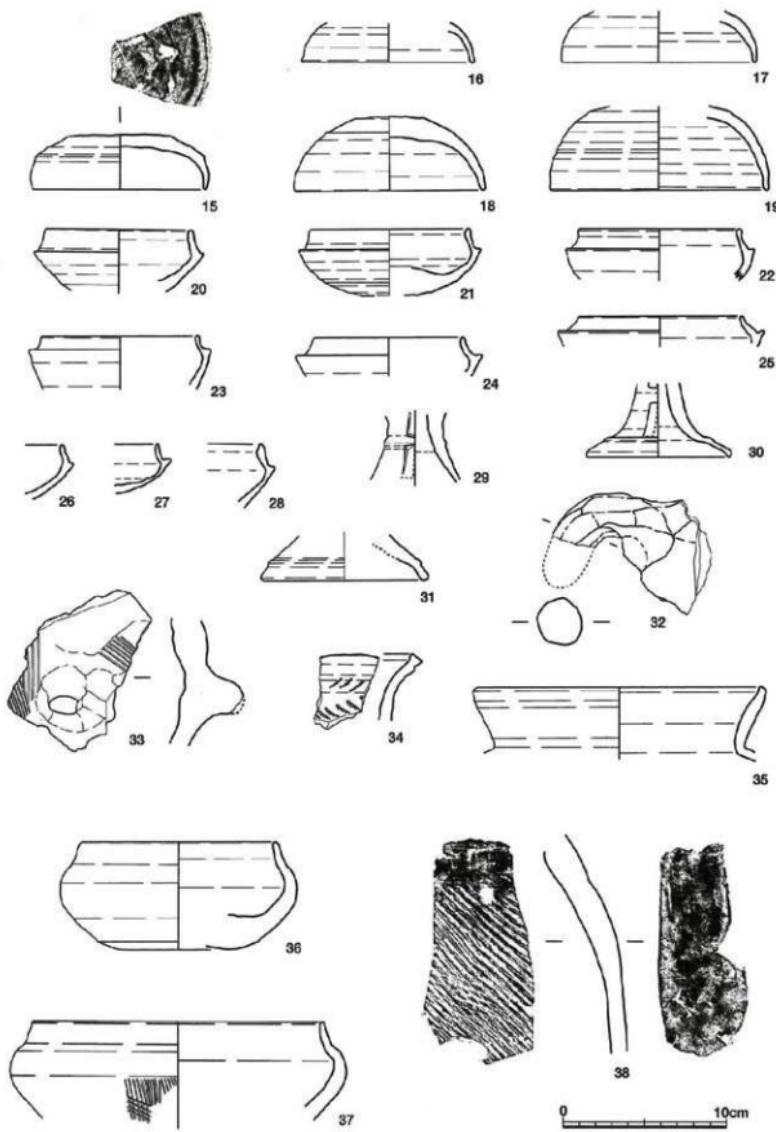
C地点表土より印刻が施された灰釉陶器の碗を探集した。高台径は6.5cmを測り、底部は未調整である。



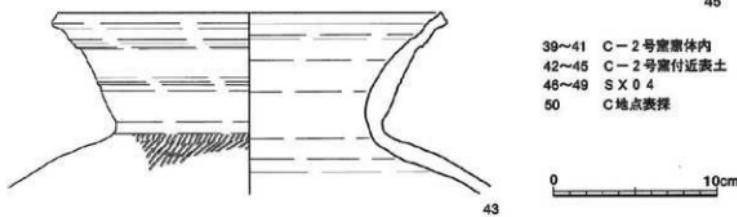
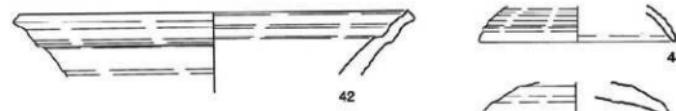
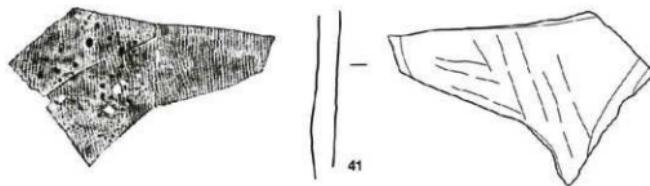
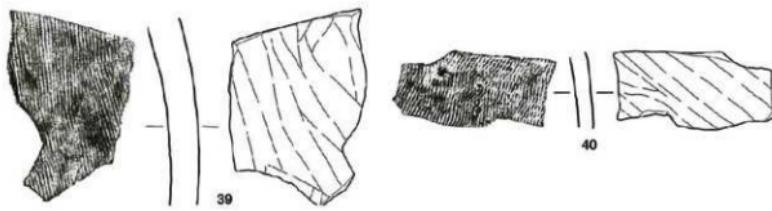
第22図 C-1号窯出土遺物（1）

1~12 窯体内埋土上層
13・14 窯体内埋土下層

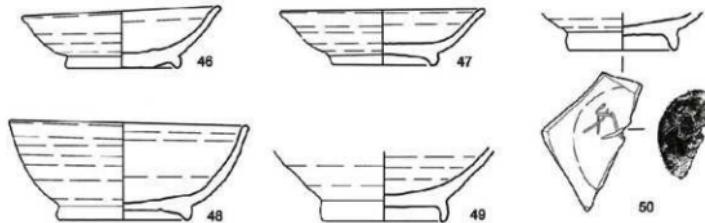
0 10cm



第23図 C-1号窯出土遺物(2)



39~41 C-2号窑窑体内
42~45 C-2号窑付近黄土
46~49 SX04
50 C地点表探



第24図 C-2号窑・C地点出土遺物

第4節 D地点の遺構と遺物

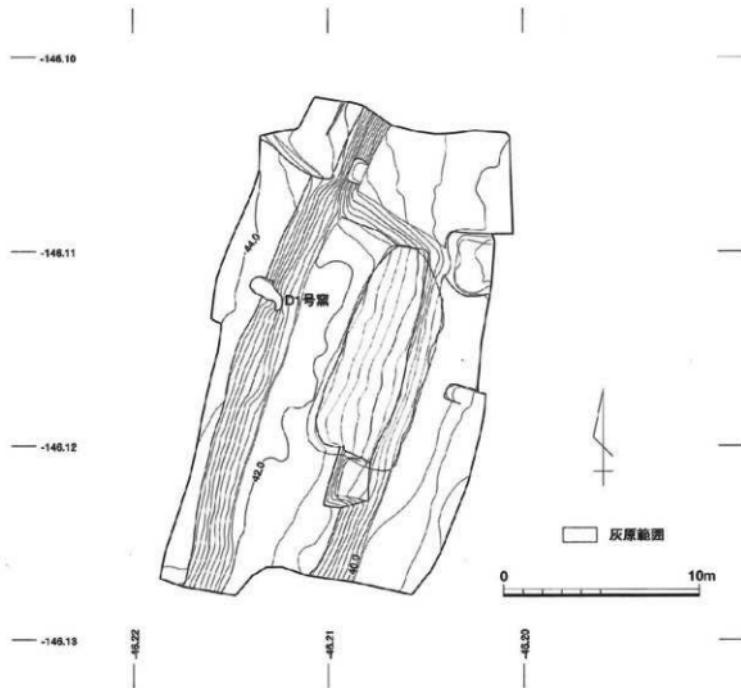
1 遺構

後世の耕作により斜面部は段々畝となっていたが、灰粙窯1基と灰原が確認された。

1) D-1号窯

窯体（第26図、写真13）

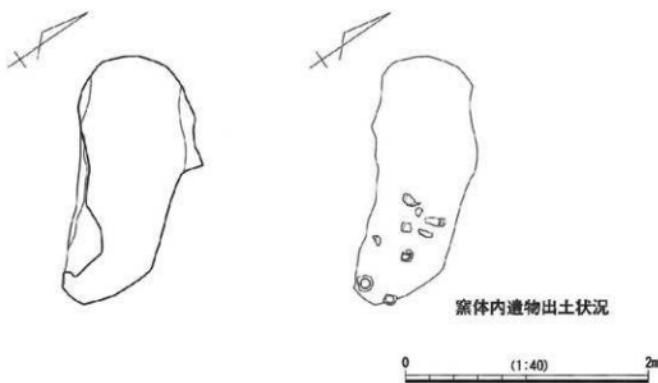
標高44.00~42.60mに位置する。主軸はN-55° 11' 46"-Wを指し、煙道部、前庭部を後世の擾乱により著しく破壊されていた。焼成室も北壁の一部が破壊されていたが、半地下式の窯窓である。残存焼成室の長さは1.90m、幅0.90m、残存壁高0.50mを測り、約0.30m窯体内に向かって、ドーム状に壁が残っていた。窯体内からは、碗類の破片が出土している。



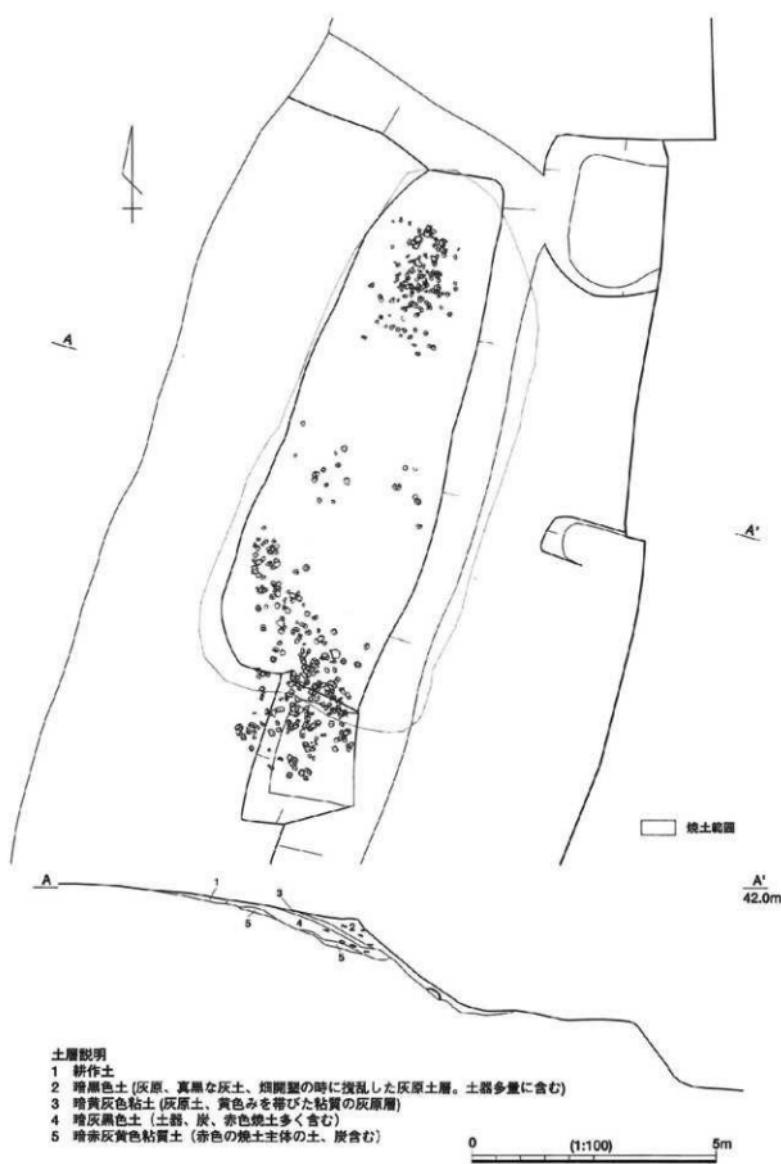
第25図 D地点全体図

灰原（第27・28図、写真13-2・14）

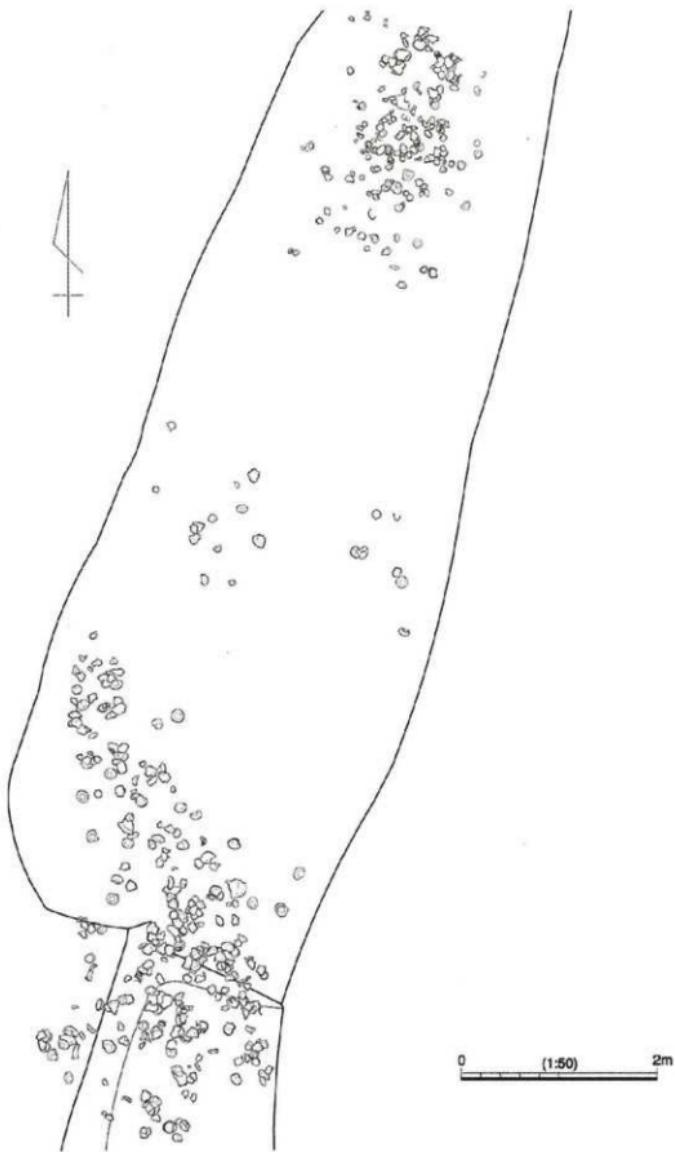
D-1号窯より東へ3.50m離れて、標高42.00～40.00mに灰原が広がっている。灰原中心で南北約13.0m、東西約5.0mの楕円状に遺物が出土している。灰原は東斜面の中段となる平坦地に広がっていた。灰原の上層は、段々畑にするための搅乱を受けているが、落ち込みの上端から3.50m奥までの範囲で灰原の堆積が確認された。堆積層の最も厚い部分で0.70mを測る。灰原からは、碗・皿・壺等と窯道具が出土している。



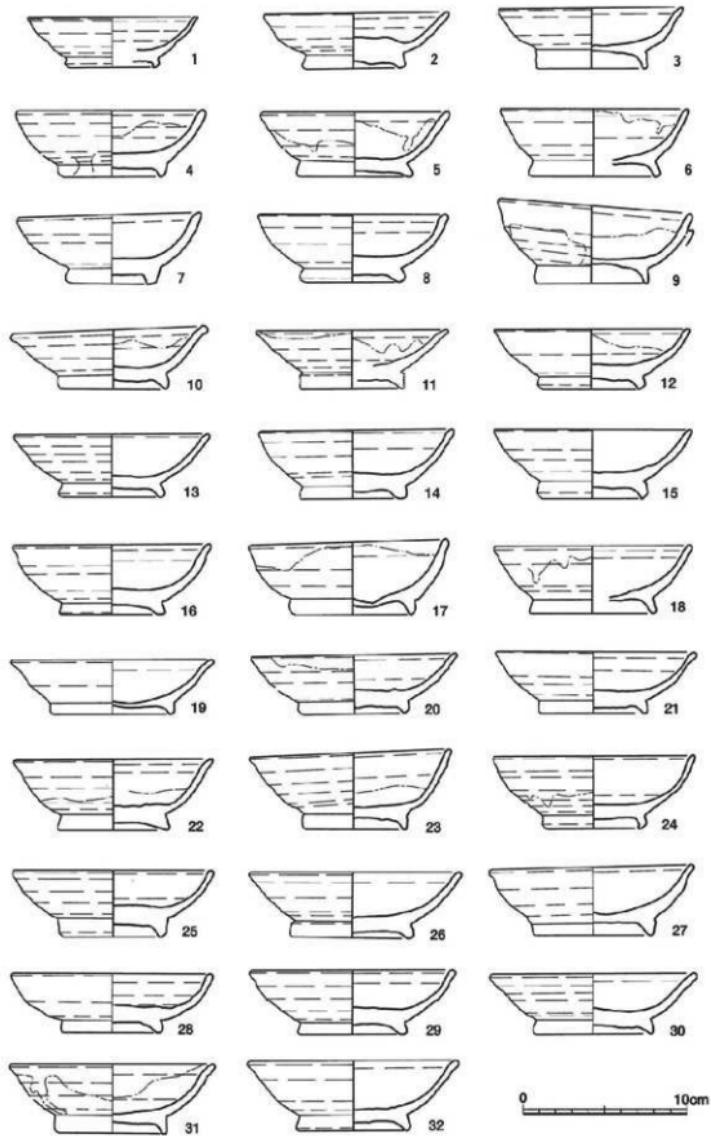
第26図 D-1号窯実測図



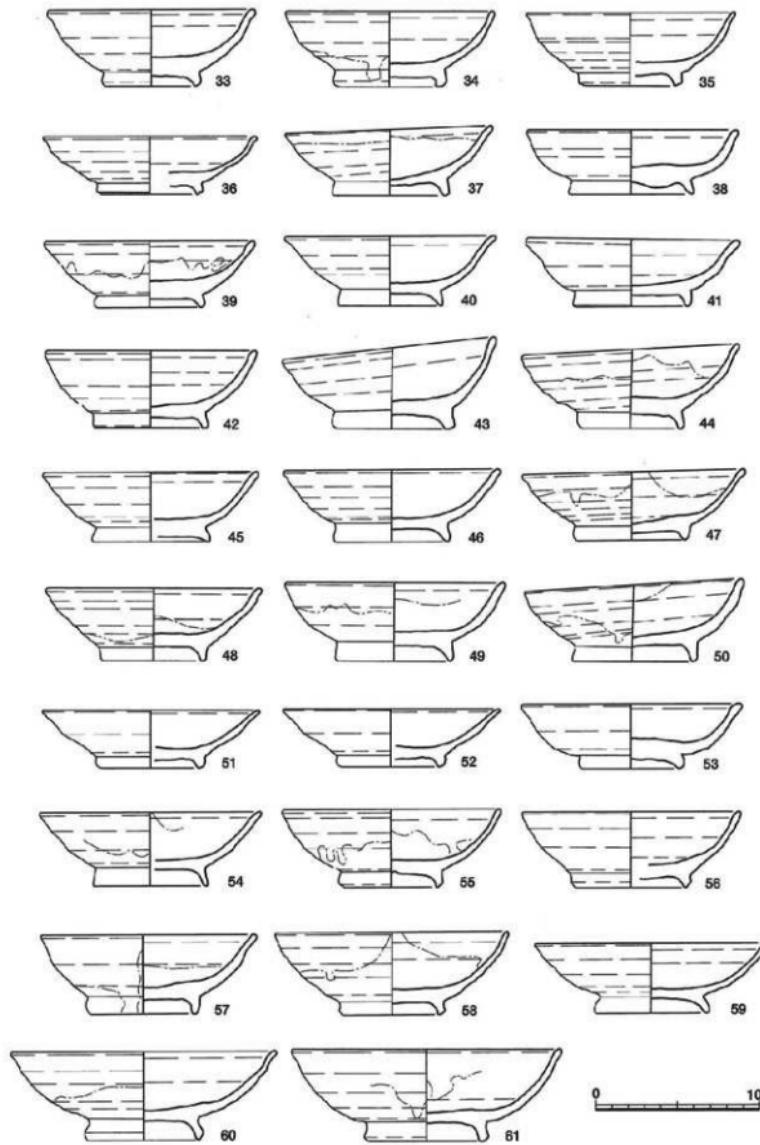
第27図 D-1号窯灰原実測図



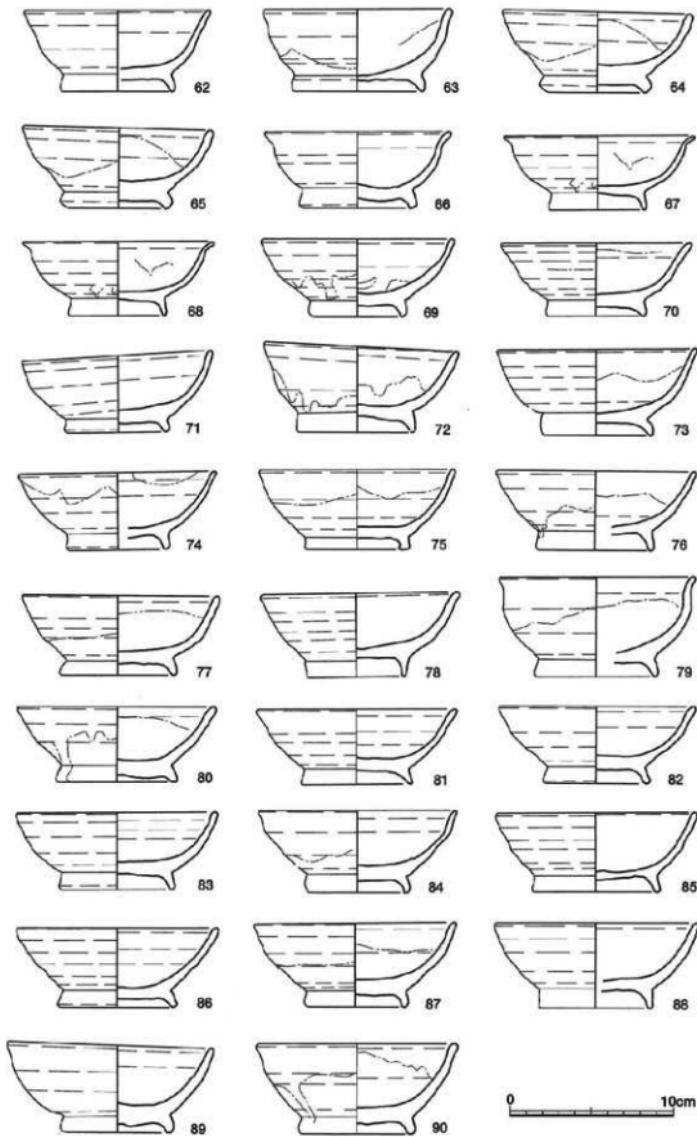
第28図 D-1号窯灰原遺物出土状況図



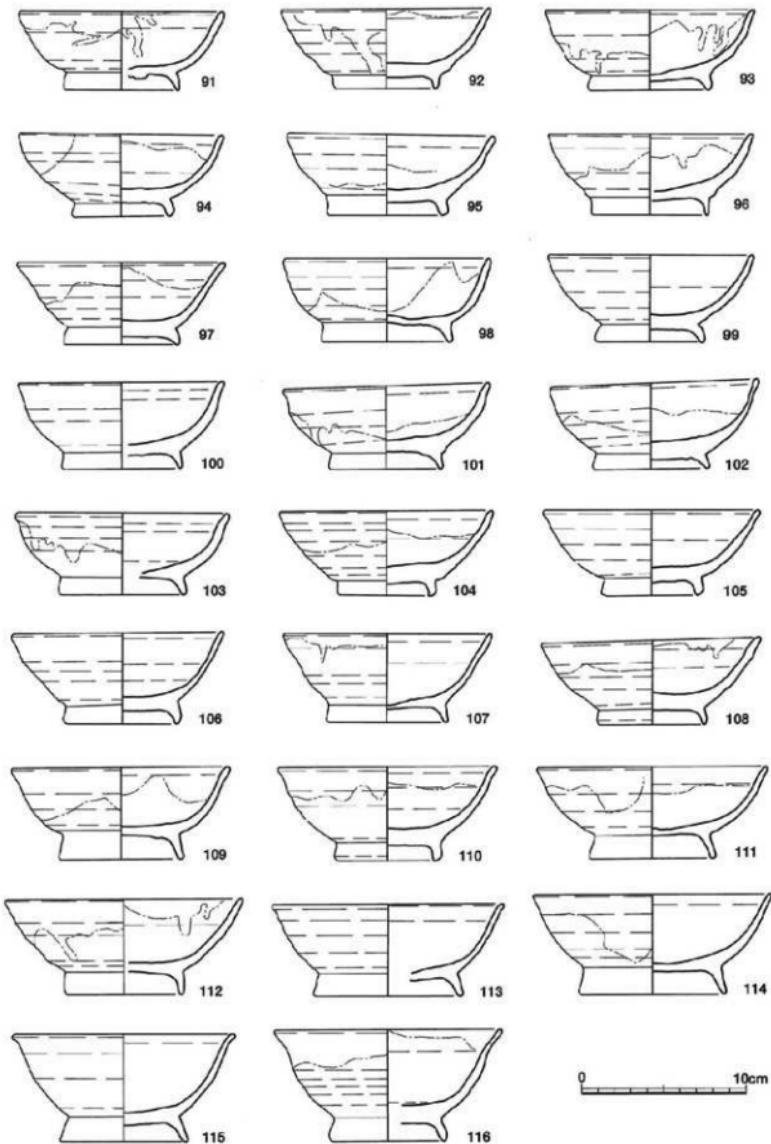
第29图 D-1号窑出土遗物(1)



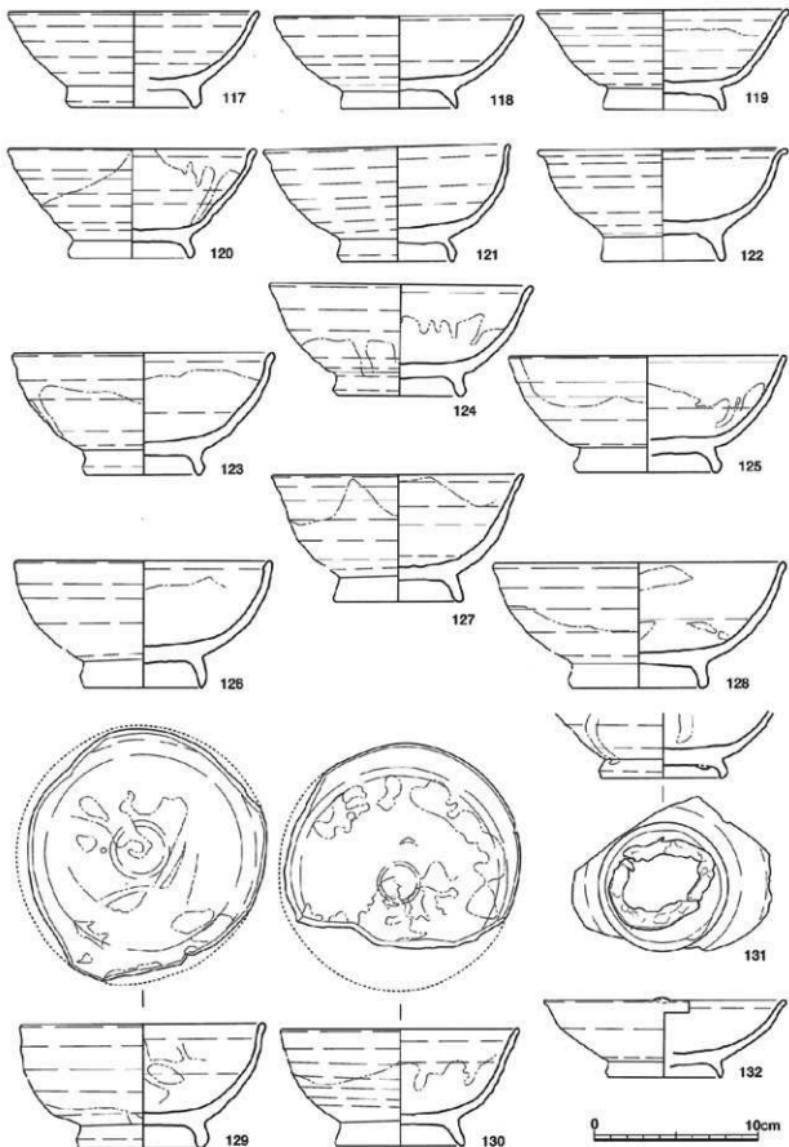
第30図 D-1号窯出土遺物（2）



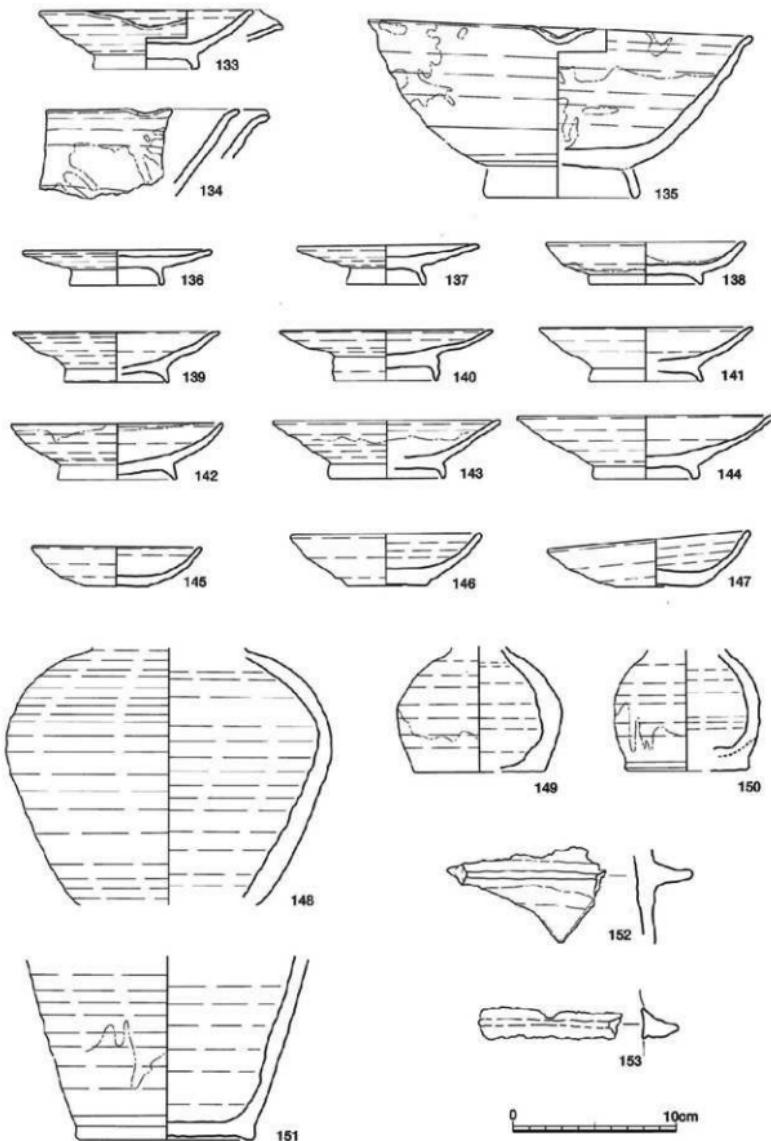
第31図 D-1号窯出土遺物(3)



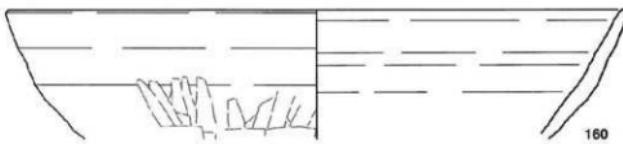
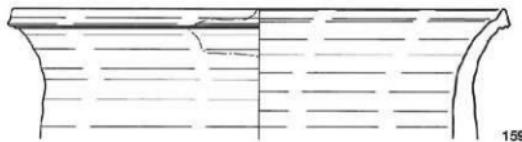
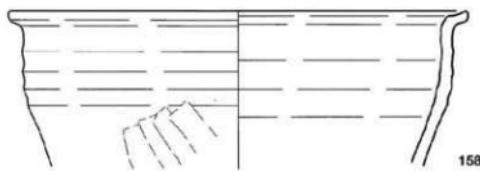
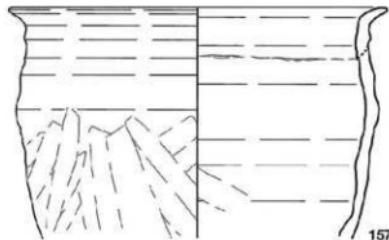
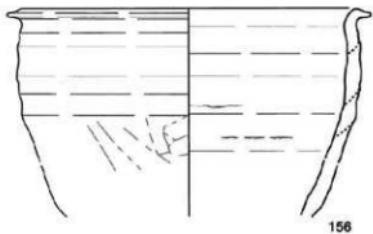
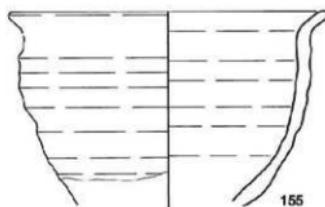
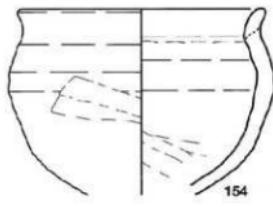
第32図 D-1号窯出土遺物(4)



第33図 D-1号窯出土遺物(5)

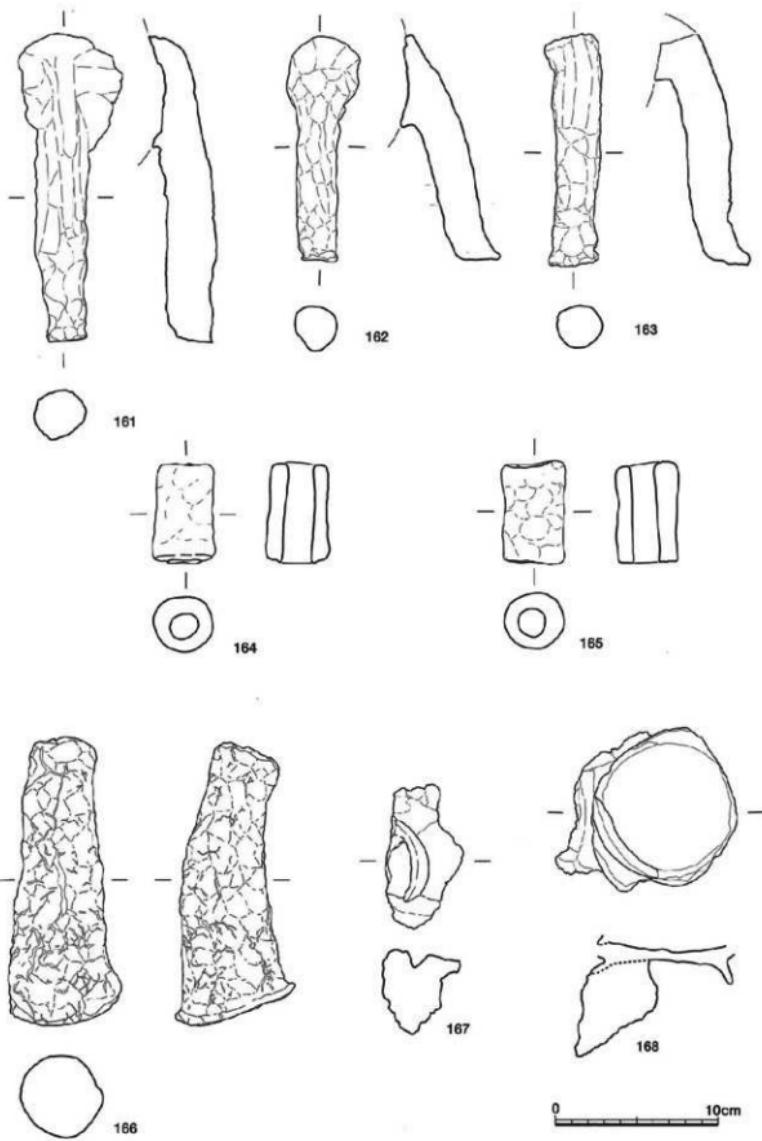


第34図 D-1号窯出土遺物(6)



0 10cm

第35図 D-1号窯出土遺物(7)



第36図 D-1号窯出土遺物(8)

2 遺物

1) D-1号窯 (第29~36図)

D-1号窯は灰釉陶器窯である。出土器種は碗類（碗・深碗・輪花碗・片口碗）、皿、無台碗、瓶類（広口瓶・水瓶）、壺類、羽釜、鉢類（鉢・片口鉢・脚付鉢）、甕、陶錠、また窯道具としてツク・焼台が出土している。各器種の生産量については碗・深碗がほぼ同数の比率で多数を占めている。

窯体内床面直上からの出土ではなく、窯体内埋土から若干の遺物が見られたが、いずれも小破片であり灰原出土資料との差異は認められないことから、以下では灰原出土資料について報告を行う。

碗 (第29・30図 1~61)

口径は10.4~16.6cmまでの幅があり、12.0~13.0cmの範囲に集中する正規分布を示す。器高は3.1~6.4cmまであり、3.5~5.0cmのものが多い。径高指数は31~37の範囲に集中する。口縁部形態については、①端部を緩やかに外反させるもの（1・19・22他）、②そのまま直線的に丸くおさめるもの（2・3・4他）、③そのまま直線的におさめ端部を平坦にするもの（10・29・30他）などが見られ、②が主体的である。体部は内湾しているものと直線的なものとに分かれるが、前者が基本的である。高台部は底部と体部の境に貼り付けられており、形態は断面台形状、三角形状のものが多い。底部調整については全て未調整である。灰釉は全て漬けがけによるもので、範囲は口縁部内外面のみのものから体部下半内外面にまでいたるものもある。発色している個体の割合は約46%である。

その他、特殊資料として、内面底部中央に糸切り痕の見られるものがある（39・43）また、高台部底面に初期状压痕、ヘラ状压痕、ヘラ先状压痕の残るものが見られる。

碗の焼成方法については直接の重ね焼きによるものである。

深碗 (第31~33図 62~131)

口径は11.2~17.7cmまでの幅があるが、11.5~13.0cmと14.0~15.5cmの範囲に集中する。器高は4.5~7.8cmまであり、4.5~5.5cmのものが多数である。径高指数は40前後に集中する。体部下半の腰が張り、高台もやや高いものを付している資料が多い。口縁部形態については、①端部を緩やかに外反させるもの（62・66・67他）、②そのまま直線的に丸くおさめるもの（63・64・65他）、③そのまま直線的におさめ端部を平坦にするもの（95）などが見られる。高台形態は断面三角形状のものが多い。底部調整は全て未調整である。灰釉は全て漬けがけを基本とし、体部半ば程度まで浸されている。発色している個体の割合は約67%である。128~130は内面底部に一条の沈線が同心円文状に施されている。同心円文の径は129で約3.6cm、130で約2.6cmを測る。また、円文が施された深碗は刷毛塗りによって施釉されている。

輪花碗 (第33図 132)

輪花碗は1点しか認められず、その生産量は極めて少量であったものと思われる。132は口径14.5cm、器高4.7cm、径高指数32.4を測る。輪花はヘラ状工具の先端を用いて外側から押圧する手法が用いられている。

片口碗 (第34図 133)

口径12.9cm、器高4.6cmを測る。口縁部の1ヶ所を内側から指により押圧し、片口流部を作り出したものである。灰釉は施されていない。

皿 (第34図 136~144)

口径11.0~15.6cm、器高2.2~3.9cm、径高指数19.0~26.9を測る。出土量も少なく、法量的にばらつきが認められる。口縁部形態については、①端部を緩やかに外反させるもの（139）、②そのまま直線的に丸くおさめるもの（136~138他）が見られるが、②が多くを占める。体部は緩やかに内湾するもの（142）、腰部の張るもの（138・140）、直線的なもの（136・137・139・141・143・144）がある。高台形態は断面台形状、

三角形状のものが多い。底部はいずれも未調整である。灰釉は潰けがけによるものであるが、無釉の製品が目立つ。

無台碗 (第34図 145~147)

高台を持たない碗で、口径10.4~12.2cm、器高2.4~3.2cmを測る。内湾した体部からそのまま直線的に口縁部を丸くおさめる器形である。いずれも灰釉は施されていない。

広口瓶 (第34図 148・151)

頸部から上が無いため広口瓶としては認識できないが、胴部の形状から広口瓶として推定し報告をする。胴部は肩が張り、徐々にすぼまながら底部に至る。底部には断面三角形状の高台が付けられている。調整は底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリが施されている。灰釉は148では認められないが、151では胴部下半にかけて刷毛塗りによって施されている。

水瓶 (第34図 149・150)

底部径7.6~8.0cm、残存高7.5~8.0cmを測る。頸部から口縁部の形状は不明である。胴部は中央部で最大径となり頸部にむかってすぼまっていく形状で、高台は付さない。底部には糸切り痕が認められる。

羽釜 (第34図 152・153)

羽釜の鶴の部分が出土している。小破片であるため径は復元できない。鶴部はヨコナデにより貼付けられている。断面形態は端部に丸みを持った三角形状を呈している。鶴部の長さは152で24cm、153で21cmを測る。

甕 (第35図 154~159)

口径15.0cmのやや小型のもの (154)、口径21.4~23.0cmの中型のもの (155~157)、口径28.2~31.0cmの大型のもの (158・159) がある。球胴形を呈するもの (154) と底部から胴部に向かって徐々に広がり胴部のやや上よりで最大径となり、口縁部に向かって徐々にすぼまる形態のもの (155~159) とがある。口縁部は外方に向かってのび端部を丸くおさめるもの (154・155) と尖り気味におさめるもの (157)、横方向にのび端部を尖り気味におさめるもの (156) と平坦におさめるもの (158)、上方につまみ上げて尖り気味におさめるもの (159) がある。成形はヨコナデによって行われるが、ヨコナデ後、外面底部から胴部最大径の範囲にかけて静止ヘラケズリが施されている。154は横方向に近く、156~158は縦方向を基調としている。また、155は底部付近のみに横方向の静止ヘラケズリを施している。内面についても154・157では底部付近で横方向もしくは斜め方向のユビナデが施されている。胎土には粒径1.0cm以下の礫が多量に含まれており、混和材として意図的に混入したものと思われる。

鉢 (第35図 160)

口径37.8cmを測る。体部はわずかに内湾しながらたちあがり口縁部はそのまま直線的に丸くおさめている。成形は回転ナデを基本とするが、回転ナデ後体部下半に静止ヘラケズリが施される。切り合い関係から縦方向の静止ヘラケズリ後、底部付近に横方向の静止ヘラケズリがなされている。

片口鉢 (第34図 134・135)

口縁部の1ヶ所を内側から指により押圧し、片口流部を作り出している。135は口径23.3cm、残存高8.5cmを測る。134は体部下半近くまで回転ヘラケズリが施されている。134・135ともに刷毛塗りによって施釉されている。

脚付鉢 (第36図 161~163)

脚部のみ出土している。161は最大長18.0cm、最大径3.3cm、162は最大長13.8cm、最大径2.4cm、163は最大長14.3cm、最大幅3.0cmを測る。161・163は脚部上方にヘラ状工具による縦方向のケズリを施す。その他の部位および162はユビナデ、ユビオサエによって成形されている。

陶鍋（第36図 164・165）

164は長さ6.1cm、最大径3.9cm、重量約50g、165は長さ6.3cm、最大径3.9cm、重量約65gを測る。形状は寸同の円筒形で、ユビナデ、ユビオサエにより成形されている。色調は浅黄橙色を呈し、還元化されていない。

ツク（第36図 166）

上端に向かって湾曲しながら徐々に細くなっていく形状のものである。長さ15.4cm、最大径6.8cmを測る。ユビナデおよびユビオサエにより成形されている。

焼台（第36図 167・168）

いわゆる馬蹄形状を呈し、高台の片側半分を上面にのせている。よって上面には高台の圧痕が認められ、側面には成形もしくは床面設置時に伴う指頭圧痕が見られる。

出土遺物観察表（1）

図版	取上番号	地点	遺構	出土位置	遺物	器種	口径	器高	径高指数	高台径	調整	色調	備考
9-1	8	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(11.2)	3.5	31.2	(6.5)	未調整	素灰色	
9-2	7	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.0	3.4	26.5	6.4		赤灰色	
9-3	61	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.0	3.3~3.9	27.5~32.5	6.7	未調整	灰色~青灰色	
9-4	66	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(11.6)	3.9	33.6	6.2	未調整	暗灰色	
9-5	102	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	11.8	3.8	32.2	6.5	未調整	暗灰色	
9-6	24	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(11.2)	4.1	36.6	6.6	未調整	青灰色	
9-7	17	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(12.0)	4.0	33.3	(6.5)	未調整	灰色	
9-8	82	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.2	4.0	32.8	6.1		灰褐色	
9-9	91	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(12.2)	3.9	32.0	(6.4)	未調整	素灰色	
9-10	91	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.3	3.3~3.9	26.8~31.7	5.9	未調整	赤灰色	
9-11	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.0	3.5		6.2	未調整	暗灰色 印刷花蝶文	
9-12	37	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.3	3.0~4.2	24.4~34.1	6.5	未調整	暗灰色	
9-13	24	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(12.4)	3.5		(6.2)		灰白色	
9-14	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.4	4.3	34.7	6.1	未調整	暗灰色~灰白色	
9-15	98	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.4	4.1	33.1	5.6	未調整	暗灰色	
9-16	6	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.5	4.0	32.0	7.4	未調整	素灰色	
9-17	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.5	3.8	30.4	5.9	未調整	灰色	
9-18	102	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.5	3.7	29.6	6.8	未調整	赤灰色~灰褐色	
9-19	37	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.5	4.0	32.0	6.9	未調整	暗灰色	
9-20	238	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.6	3.9~4.3	31.0~34.1	6.5	未調整	灰白色~青灰色	
9-21	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(12.6)	4.4		6.4	未調整	灰白色	
9-22	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(12.6)	4.4	34.9	(5.4)	未調整	灰色~白色	
9-23	238	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.6	4.1~4.7	32.5~37.5	5.9	未調整	灰色	
9-24	81	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.7	3.7~4.2	29.1~33.1	5.0	未調整	暗灰色	
9-25	160	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗				(7.8)		灰白色	底部中央に穿孔
9-26	56	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.8	3.7	28.9	6.3	未調整	灰白色~灰褐色	
9-27	228	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.8	3.6~4.0	28.1~31.3	6.5	未調整	灰色	
9-28	79	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.9	4.5	34.9	7.3	未調整	灰色~暗灰色	
9-29	239	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	12.9	4.7	36.6	7.0	未調整	灰白色	
10-30	78	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.1	3.4~4.0	26.0~30.5	7.3	未調整	灰褐色	
10-31	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.0)	4.0	30.8	(6.2)	未調整	灰白色	
10-32	257	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.1)	4.1		6.0	未調整	灰色	
10-33	89	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.0	4.6	35.4	6.6	未調整	灰色	
10-34	239	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.0)	4.4	33.8	6	未調整	灰白色	
10-35	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.0	4.5	34.6	6.5	未調整	灰色	
10-36	119	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.1	4.2	32.1	6.3	未調整	灰白色	
10-37	119	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.1)	4.0	31.3	6.6	未調整	素灰色	
10-38	7	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.2	3.8	28.8	6.5	未調整	灰白色	
10-39	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.2)	3.9	29.5	6.5	未調整	灰色	
10-40	117	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.1	3.8~4.2	29.0~32.1	6.5	未調整	灰褐色	
10-41	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.1	4.4	33.6	6.2	未調整	灰色	
10-42	234	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.2)	4.4		(6.6)		灰色	
10-43	238	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.2	4.2	31.8	5.8	未調整	灰色	
10-44	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.2	4.2	31.8	6.1	未調整	灰色	
10-45	102	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.2	4.1	31.1	6.2	未調整	灰色	
10-46	246	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.3	4.2	31.6	6.6	未調整	灰色	
10-47	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.5	4.1~4.4	30.4~32.6	6.7	未調整	青灰色	
10-48	246	B	B-1	土層土手	灰釉陶器	碗	13.6	4.1~5.0	30.1	6.7	未調整	灰色	
10-49	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.4	4.4~5.1	32.8~36.1	6.8	未調整	灰白色	
10-50	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.4)	4.7	35.1	6.8	未調整	青灰色~灰褐色	
10-51	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.5	4.8	35.6	6.6	四輪ヘラ ケズ	灰白色	
10-52	106	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.5	4.1	30.4	6.4	未調整	灰色	
10-53	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.6	4	29.4	7.1	未調整	灰白色	
10-54	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(13.6)	4.1	30.1	(6.4)	未調整	灰色	
10-55	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.6	4.1	30.1	6.2	未調整	青灰色	
10-56	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.7	4.4	32.1	7.0	未調整	青灰色	

【凡例】 () 内の数値は復元値、器種は推定であることを示す。数値の単位はcm。

出土遺物観察表（2）

図版	取上番	地点	遺構	出土位置	遺物	器種	口径	器高	径高指数	高台性	調整	色調	備考
11-57	238	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.6	4.4	32.4	7.4	未調整	灰白色	
11-58	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.7	4.4	32.1	7.2	未調整	灰色	
11-59	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.8	4.5	32.6	7.2	未調整	灰色~白色	
11-60	239	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	14.0	4.5	32.1	(6.8)	未調整	灰色	
11-61	238	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	14.2	4.4~4.4	31.0~33.8	6.8	未調整	灰白色	
11-62	231	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	14.6	4.6	31.5	7.0	未調整	青灰色	
11-63	61	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(14.8)	5.1	34.5	7.6	未調整	灰色~灰褐色	
11-64	102	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(15.6)	4.7	30.1		未調整	渐灰色~深灰色	
11-65	37	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(15.8)	4.7	29.7	7.0	未調整	青灰色	
11-66	5	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(12.6)	5.1	40.5	7.0	未調整	渐灰色~白色	
11-67	216	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(12.9)	5.1	39.5	(6.3)	未調整	灰色	
11-68	70	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	13.0	5.5	42.3	5.8	不明瞭	赤褐色	
11-69	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(14.8)	6.7	45.3	(7.0)	未調整	灰色	
11-70	24	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(15.2)	6.7	44.1	6.8	未調整	灰色	
11-71	58	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	(15.4)	6.8	43	7.0	未調整	灰色	
11-72	228	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	15.4	6.3	6.9		未調整	青灰色	
11-73	237	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	14.4	6.3~6.9	43.8~47.9	7.6	未調整	明褐色灰色	
11-74	37	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	(15.6)	7.8	50.0	(7.4)	未調整	灰白色	
11-75	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	(16.6)	6.7	40.4	7.6	未調整	青灰色~白褐色	
11-76	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	(16.2)	6.7~7.0	41.4~43.2	7.1	未調整	青灰色	
11-77	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	15.7	6.9	43.9	7.8	未調整	青灰色~灰褐色	
11-78	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	(16.2)	6.4	39.5	7.8	未調整	灰白色	
11-79	217	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	(16.4)	6.8	38.4	6.8	未調整	灰白色	
11-80	66	B	B-1	灰原	灰釉陶器	深碗	16.5	6.9	41.8	7.6		灰褐色~褐色	
12-81	103	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花碗	14.3	4.8		6.8		青褐色	
12-82	69	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花碗	(15.6)	5.8~6.0		7.2	未調整	灰色	
12-83	146	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花碗	(14.9)	4.9~5.5		7.6	未調整	灰色	
12-84	228	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花碗	15.2	5.4~6.3		6.4	未調整	深灰色	
12-85	37	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花碗	14.3	5.4		6.4	未調整	灰色	
12-86	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花碗	(16.5)	5.8		(7.4)	未調整	深灰色	
12-87	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花深碗	(12.8)	5.8		7.6	未調整	暗灰色	
12-88	37	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花深碗	(13.2)	5.4	40.9	7.0	未調整	灰色	
12-89	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花深碗	(13.4)	5.8		6.8	未調整	深灰色	
12-90	105	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花深碗	14.9	5.9		7.5	未調整	灰色	
12-91	69	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花深碗	14.8	5.7		7.4	未調整	暗灰色	
12-92	102	B	B-1	灰原	灰釉陶器	輪花深碗	(14.9)	7.2		7.4	未調整	灰色	
12-93	212	B	B-1	灰原	灰釉陶器	片口碗	(12.6)	(3.4)		(8.4)		暗灰色	
12-94	212	B	B-1	灰原	灰釉陶器	片口碗	(12.4)	4.6		(5.0)		灰色	
12-95	133	B	B-1	灰原	灰釉陶器	片口碗				10.2		深灰色	
12-96	212	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	(9.8)	2.2	22.4	5.4	未調整	青灰色	
12-97	42	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	(10.8)	2.9	26.9	6.4	未調整	灰白色	
12-98	7	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	11.7	3.1	26.5	(6.4)	未調整	赤灰色	
12-99	213	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	12.4	3.4	27.4	5.9	未調整	灰褐色~白色	
12-100	24	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	(12.6)	3.3	26.2	(6.8)		暗灰色	
12-101	7	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	(13.8)	3.6	26.1	(7.6)	未調整	暗灰色	
12-102	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	14.3	3.4	23.8	6.8		渐灰色~白色	
12-103	70	B	B-1	灰原	灰釉陶器	直	(14.8)	2.5		(3.0)	未調整	青灰色	
12-104	231	B	B-1	灰原	灰釉陶器	無足碗	(13.0)	2.2		6.6	未調整	灰色	
12-105	B-1	B	B-1	灰原	灰釉陶器	無足碗	11.3	3.6		6.0	未調整	灰色	
12-106	B-1	B	B-1	灰原	灰釉陶器	無足碗	12.3	3.1			未調整	灰色~灰褐色	
12-107	B-1	B	B-1	灰原	灰釉陶器	無足碗	(15.0)	7.0		7.0	未調整	灰褐色	
12-108	B-1	B	B-1	灰原	灰釉陶器	無足碗	(18.6)					暗灰色	
12-109	70	B	B-1	灰原	灰釉陶器	無足碗	(13.4)					深灰色	

【凡例】() 内の数値は復元値、器種は推定であることを示す。数値の単位はcm。

出土遺物観察表(3)

図版	取上No	地点	遺構	出土位置	遺物	器種	口径	器高	径高指数	高台径	調整	色調	備考
13-110	51・64・67・102	B	B-1	灰原	灰釉陶器	広口壺	(17.6)					茶灰色	灰釉陶毛抜き
13-111	074・113・154	B	B-1	灰原	灰釉陶器	広口壺	(20.4)					灰色	灰釉陶毛抜き
13-112	151・241	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(瓶)				7.8		灰色	
13-113	212	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(瓶)				6.8	未調整	茶灰色	
13-114	51	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(瓶)				(5.7)		灰色	
13-115	48・52・58	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(瓶)				(7.0)		灰色	
13-116	174	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(灰耳壺)	(14.6)					灰色～灰白色	
13-117	176	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(壺)	(11.2)					暗灰色	灰釉陶毛抜き
13-118	183・203	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(把手付壺)						灰色「大」刻書	
13-119	102	B	B-1	灰原	灰釉陶器	壺	(21.2)					灰色	
13-120	220・233・245	B	B-1	灰原	灰釉陶器	壺	(22.1)					米白色	
13-121	192・228	B	B-1	灰原	灰釉陶器	壺	(17.6)					暗灰色	
14-122	210	B	B-1	灰原	灰釉陶器	脚付尊	(17.6)	13.5				暗灰色	
14-123	233	B	B-1	灰原	灰釉陶器	(高壺)				(7.8)		白灰色	
14-124	51	B	B-1	1号窯 西斜面表土	灰釉陶器	灰釉陶器	最大幅:5.1		最大長:4.8			暗灰色	
14-125	137	B	B-1	灰原	鐵鍛具	筋鍛車	8.3	2.2				暗灰色	
14-126	241	B	B-1	灰原	漁具	陶錐	3.5	6.2	重量50g			黃褐色	
14-127	100	B	B-1	灰原	漁具	陶錐	1.5	4.0	重量約5g			灰褐色	
14-128	54	B	B-1	灰原		陶丸	0.9	1.2				暗灰色	
14-129	217	B	B-1	灰原		風字鏡						暗灰色	
14-130	203	B	B-1	灰原		風字鏡						灰色	
14-131	157	B	B-1	灰原		瓦						暗灰色	
14-132	212	B	B-1	灰原		軒平瓦						暗灰色	
14-133	8	B	B-1	灰原		瓦						灰色	
15-134	7	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	残存:5.7					重ね挽き4枚以上	
15-135	228	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	残存:6.1～7.5					重ね挽き5枚以上	
15-136	57	B	B-1	灰原	灰釉陶器	碗	残存:11.3～11.7					重ね挽き6枚以上	
15-137	205	B	B-1	灰原	窯道具	トラン	1.3	4.2				暗灰色	
15-138	205	B	B-1	灰原	窯道具	ツク	7.1	18.8					
15-139	207	B	B-1	灰原	窯道具	ツク	5.8	14.6					
15-140	212	B	B-1	灰原	窯道具	ツク	残存長:8.2		徑:3.4				
15-141	11	B	B-1	灰原	窯道具	ツク	残存長:8.8		徑:4.0				
15-142	235	B	B-1	灰原	窯道具	ツク	長:10.4		徑:6.0				
15-143	235	B	B-1	灰原	窯道具	(障焰棒)	幅:14.0	高さ:22.0					
16-144	250-7	B	SX03	灰原	灰釉陶器	碗			8.6			茶灰色～白色	
16-145	250-7	B	SX03	灰原	灰釉陶器	壺			6.0			灰色～灰白色	底部中央に穿孔
16-146	250-5	B	SX03	灰原	灰釉陶器	広口壺	(9.0)					灰色	
16-147	250-4	B	SX03	灰原	灰釉陶器	広口壺	10.0					灰色	
16-148	250-5	B	SX03	灰原	灰釉陶器	壺	(15.8)					灰色	
16-149	250-5	B	SX03	灰原	灰釉陶器	壺	(28.0)					赤灰色	刻書
16-150	337-43	B	SX01	上層	灰釉陶器	碗	(11.6)	3.6	(6.7)	未調整		灰白色～白色	
16-151	337-59	B	SX01	上層	灰釉陶器	碗	(15.8)	5.9	(8.2)	未調整		灰色	
16-152	337-72	B	SX01	下層	灰釉陶器	碗	(12.6)	4.4	(6.6)	未調整		暗灰色	
16-153	337-63	B	SX01	下層	灰釉陶器	碗	(15.2)	4.6	(6.8)	未調整		暗灰色	
16-154	337-44	B	SX01	上層	漁具	陶錐	3.8	5.4	重量50g			黄褐色	
16-155	337-85	B	SX01	下層	漁具	陶錐	3.5	5.0	重量50g			黄褐色	
16-156	337-3・51・103	B	SX01	上・下層	灰釉陶器	壺	(21.6)					ヘラケズリ	暗灰色
16-157	338-22	B	SX02	上層	灰釉陶器	碗	(12.8)	4.1	(6.4)	未調整		灰色	
16-158	338-18	B	SX02	上層	灰釉陶器	碗	(13.2)	5.2	(7.0)	未調整		灰色	
16-159	338-40	B	SX02	下層	灰釉陶器	碗	(13.0)	3.9	(6.2)	未調整		黄褐色	
16-160	338-39	B	SX02	下層	灰釉陶器	碗	(13.1)	5.3	(7.0)			灰色	
16-161	338-48	B	SX02	下層	灰釉陶器	(碗)			(10.0)	未調整		灰色	

【凡例】 () 内の数値は復元値、器種は無定であることを示す。数値の単位はcm。

出土遺物観察表(4)

版面	取上No	地点	遺構	出土位置	遺物	器種	口径	器高	浮高指數	高台仔	調整	色調	備考
22-1	336-2	C	C-1	床面	須恵器	壺蓋	(11.0)	4.3				赤褐色	
22-2	332-76	C	C-1	床面	須恵器	壺蓋	11.4	3.9				赤灰色	
22-3	332-90	C	C-1	床面	須恵器	壺身				回転ヘラ ケズリ		暗青灰色	
22-4	343-5, 6, 8	C	C-1	床面	須恵器	壺蓋	(13.4)	3.4				赤灰色	
22-5	336-4	C	C-1	床面	須恵器	壺蓋	(13.6)					青灰色	
22-6	332-7	C	C-1	床面	須恵器	無蓋高壺	(12.8)					青灰色	
22-7	332	C	C-1	床面	須恵器	壺	(14.0)					暗灰色	
22-8	332-67	C	C-1	床面	須恵器	壺	(14.0)					暗灰色～赤灰色	
22-9	332-22	C	C-1	床面	須恵器	提瓶	(10.0)					暗灰色～赤灰色	
22-10	332-19	C	C-1	床面	須恵器	器台						暗灰色～赤灰色	
22-11	332-63	C	C-1	床面	須恵器	鉢	(15.8)	14.5		13.2		暗灰色～赤灰色	歪み大
22-12	334-12	C	C-1	灰原	金道具	焼白	報知110×横幅16.7×高さ122					黄褐色	
22-13	385-10	C	C-1	床面	須恵器	壺身	(12.0)					青灰色	
22-14	385-18	C	C-1	床面	須恵器	有蓋高壺	(18.8)					青灰色	
23-15	290	C	C-1	灰原	須恵器	壺蓋	(10.6)	3.4	32.1		回転ヘラ ケズリ	赤褐色～ 暗青灰色	ヘラ記号
23-16	275	C	C-1	灰原	須恵器	壺蓋	(10.4)					灰色	
23-17	257	C	C-1	灰原	須恵器	壺蓋	(11.8)					暗灰色	
23-18	290	C	C-1	灰原	須恵器	壺蓋	(11.8)	4.6		回転ヘラ ケズリ		灰色	
23-19	278・282	C	C-1	灰原	須恵器	壺蓋	(13.2)			回転ヘラ ケズリ		灰色	
23-20	284	C	C-1	灰原	須恵器	壺身	(9.0)					暗青灰色	
23-21	280	C	C-1	灰原	須恵器	壺身	(9.6)			回転ヘラ ケズリ		青灰色	
23-22	280	C	C-1	灰原	須恵器	壺身	(9.8)					暗青灰色	
23-23	257	C	C-1	灰原	須恵器	壺身	(9.6)					暗灰色	
23-24	264	C	C-1	灰原	須恵器	壺身	(9.2)					暗灰色	
23-25	257	C	C-1	灰原	須恵器	壺身	(9.8)					赤灰色	
23-26	284	C	C-1	灰原	須恵器	壺身						淡灰色	
23-27	291	C	C-1	灰原	須恵器	壺身						淡灰色	
23-28	291	C	C-1	灰原	須恵器	壺身						青灰色	
23-29	273	C	C-1	灰原	須恵器	高壺			(8.8)			暗灰色	
23-30	275	C	C-1	灰原	須恵器	高壺			(10.0)			灰色	
23-31	359	C	C-1	灰原	須恵器	高壺						灰色	
23-32	257	C	C-1	灰原	須恵器	(提瓶)						暗灰色～赤灰色	
23-33	282	C	C-1	灰原	須恵器	瓶						暗灰色	
23-34	257	C	C-1	灰原	須恵器	はう						赤褐色	
23-35	257	C	C-1	灰原	須恵器	壺	(17.6)					暗灰色	
23-36	282	C	C-1	灰原	須恵器	壺	(12.0)	5.6				暗灰色～ 暗灰色	
23-37	275	C	C-1	灰原	須恵器	壺	(18.0)					灰白色	
23-38	282・284	C	C-1	灰原	須恵器	壺					タタキ	暗灰色	
24-39	327-2	C	C-2	床面	須恵器	壺					タタキ	暗灰色	
24-40	327-10	C	C-2	床面	須恵器	壺					タタキ	暗灰色	
24-41	327-1・4・5	C	C-2	床面	須恵器	壺					タタキ	暗灰色	
24-42	262	C	C-2	天井上埋土	須恵器	壺	(24.0)					暗灰色	
24-43	295	C	C-2	付近表土	須恵器	壺	(23.6)				タタキ	暗灰色～ 灰色	
24-44	328	C	C-2	付近表土	須恵器	(壺蓋)	(12.0)					青灰色	
24-45	328	C	C-2	付近表土	須恵器	(壺蓋)				回転ヘラ ケズリ		灰色	
24-46	342-4	C	SX04	灰陶陶器	碗	12.0	3.5	29.2	6.7	未調整		灰色	
24-47	341	C	SX04	灰陶陶器	碗	12.4	3.4	27.4	6.0	未調整		灰色	
24-48	342-3	C	SX04	灰陶陶器	深碗	14.4	6.0	41.7	7.3			灰白色	
24-49	340	C	SX04	灰陶陶器	碗				(3.5)	未調整		灰白色	
24-50	348	C	C地點	表探	灰陶陶器	碗			(6.5)	未調整		灰色	

【凡例】()内の数値は復元値、器種は推定であることを示す。数値の単位はcm。

出土遺物観察表(7)

図版	取上№	地点	遺構	出土位置	遺物	器種	口径	器高	径高割数	高台径	調整	色調	備考
33-117	316-416	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(152)	5.9	38.8	(7.6)	未調整	淡赤灰色	
33-118	316-31-474	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(152)	6.7	44.1	(7.0)	未調整	青灰色~灰褐色	
33-119	382	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	153	6.2	40.5	7.2	未調整	灰色~灰褐色	ロクロ回転石
33-120	316-265	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(150)	6.8	45.3	(7.2)	未調整	赤灰色	ロクロ回転石
33-121	316-67	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	14.9	7.1	47.7	6.9	未調整	灰褐色	
33-122	316-189	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(154)	6.9	44.8	7.4	未調整	灰白色~灰褐色	
33-123	316-47	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(152)	7.5	48.1	7.5	未調整	灰色	ロクロ回転石
33-124	316-322	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(160)	7.0	43.8	(7.6)	未調整	赤灰色~白褐色	
33-125	357-184・195	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(165)	7.2	42.8	(8.6)	未調整	灰色	
33-126	357-67・84	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(156)	7.8	50.0	(7.2)	未調整	灰色	
33-127	357	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(153)	7.8	51.0	7.8	未調整	灰色	
33-128	299	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(177)	7.7	43.5	(8.0)	未調整	灰色	
33-129	316-76	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(142)	7.7		(7.5)	未調整	暗灰色	表面内面に同心円文
33-130	316-374	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	(14.4)	7.3		7.7	未調整	暗灰色	底部内面に同心円文
33-131	316-149	D	D-I	灰原	灰釉陶器	碗	7.4			7.4	未調整	暗灰色	底部外縁に墨付有
33-132	316-174	D	D-I	灰原	灰釉陶器	輪花碗	(145)	4.7	32.4	(7.0)	未調整	暗灰色	
34-133	382	D	D-I	灰原 (攪乱層)	灰釉陶器	片口碗	(125)	4.5		(5.6)	未調整	青灰色	
34-134	316-127	D	D-I	灰原	灰釉陶器	片口鉢						暗灰色	
34-135	293・301・357- 294・301	D	D-I	灰原	灰釉陶器	片口鉢	23.3				ヘラケズリ	灰色	
34-136	382	D	D-I	灰原 (攪乱層)	灰釉陶器	皿	(116)	2.2		(5.7)		暗灰色~灰白色	
34-137	382	D	D-I	灰原 (攪乱層)	灰釉陶器	皿	(110)	2.4		4.8	未調整	暗灰色~灰白色	
34-138	357-191	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿	(124)	2.6	21.0	(7.0)	未調整	灰色	
34-139	382	D	D-I	灰原 (攪乱層)	灰釉陶器	皿	(127)	3.1		(6.4)	未調整	灰色~灰褐色	
34-140	316-69	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿	(130)	3.2	24.6	(6.2)	未調整	灰白色~灰色	
34-141	382	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿	(130)	3.3	25.4	(7.0)	未調整	灰色	
34-142	316-195	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿	(130)	3.5	26.9	(7.2)	未調整	赤灰色	
34-143	357-118	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿	(138)	3.5	26.1	(7.0)	未調整	暗灰色	
34-144	316-409	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿	(156)	3.9	25.0	(7.5)	未調整	灰黃色~黃褐色	
34-145	316-232	D	D-I	灰原	灰釉陶器	無台碗	(104)	2.4		(4.0)	未調整	灰色~白色	
34-146	357-250	D	D-I	灰原	灰釉陶器	無台碗	(114)	3.2		(4.9)	未調整	青灰色	
34-147	316-274	D	D-I	灰原	灰釉陶器	無台碗	(122)	2.9		5.0	未調整	淡茶色~暗灰色	
34-148	357-78	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿						灰白色	
34-149	317	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿				(8.0)		灰色	
34-150	255	D	D-I	灰原	灰釉陶器	皿				(7.6)		灰色	
34-151	293	D	D-I	灰原	灰釉陶器	(重)				10.6		暗灰色	
34-152	293	D	D-I	灰原	灰釉陶器	羽釜						茶灰色	
34-153	293	D	D-I	灰原	灰釉陶器	羽釜						茶灰色	
35-154	316-217・376	D	D-I	灰原	灰釉陶器	甕	(150)				ヘラケズリ	茶灰色	
35-155	316-143・144・145- 148・299	D	D-I	灰原	灰釉陶器	甕	(214)				ヘラケズリ	茶灰色	
35-156	374	D	D-I	灰原	灰釉陶器	甕	(204)				ヘラケズリ	茶灰色	
35-157	316-263	D	D-I	灰原	灰釉陶器	甕	(230)					暗灰色~體灰褐色	
35-158	293・316	D	D-I	灰原	灰釉陶器	甕	(282)				ヘラケズリ	暗灰色	
35-159	293	D	D-I	灰原	灰釉陶器	甕	(310)					茶灰色	
35-160	357-139・376	D	D-I	灰原	灰釉陶器	鉢	(378)					灰白色	
36-161	311	D	D-I	灰原	灰釉陶器	脚付鉢						暗灰色	
36-162	311	D	D-I	灰原	灰釉陶器	脚付鉢						帶灰色	
36-163	320	D	D-II	灰原	灰釉陶器	脚付鉢							
36-164	298	D	D-I	灰原	漁具	陶錐	3.9	6.1	重量50g		ユビナデ ユビオサエ	浅黃褐色	
36-165	314	D	D-II	灰原	漁具	陶錐	3.9	6.3	重量50g		ユビナデ ユビオサエ	浅黃褐色	
36-166	316-51	D	D-I	灰原	漁道具	フカ	5.8	15.4					
36-167	304	D	D-I	灰原	漁道具	籠台							
36-168	316-50	D	D-I	灰原	漁道具	籠台							

【凡例】 () 内の数値は復元値、器種は推定であることを示す。数値の単位はcm。

第IV章　まとめ

今回の調査により小笠山西南麓窯跡群（以下、本章では「小笠窯」と略称）の東端に位置する釜ヶ谷窯跡の様相が判明した。検出遺構としては、須恵器窯2基（C-1号窯・C-2号窯）、灰釉陶器窯2基（B-1号窯・D-1号窯）、不明遺構4基（SX01～04）、土坑1基（SK01）である。不明遺構としたSX01～03は出土遺物の検討からB-1号窯に付随する土器捨て場であろうと推測した。またC地区において確認されたSX04は周辺に同時期の灰釉陶器窯が存在していたことを示唆するものである。

本章ではまとめとして、各窯の窯体構造および製品を総合して編年の位置付けを検討し、小笠窯全体の動向を湖西窯跡群（以下「湖西窯」と略称）・猿投山西南麓窯跡群（以下「猿投窯」と略称）との動向と絡めて概観していきたい。

編年の位置付け　須恵器窯であるC-1号窯は、蓋坏・高坏・提瓶・甕・壺・甕・こね鉢・器台など極めて豊富な器種を生産していた。このうち坏蓋について2種類の形態が見られる点に注目される。仮にA類、B類と分類して諸属性を整理すると以下のようになる。

A類：天井部と体部の境に稜もしくは沈線による稜を形成する。天井部が高く頂部を平坦にする形態が多い。口径は10.6～11.4cmと13.4～13.6cmのものが見られる。天井部の調整は回転ヘラケズリを行うものと未調整のものがあるが、前者が多い。

B類：半球形状を呈し、天井部と体部の境がない。口径は10.4cmのものと11.8cmのものが見られる。天井部の調整は回転ヘラケズリを行う。

このA類・B類とした蓋杯は共に窯体内において確認していることからC-1号窯の製品と見て間違いない。

A類はその特徴から猿投窯のものと類似する。編年の位置付け（斎藤1992・山田1998）としては東山44号窯から東山15号窯の様相に比較的近い。

B類については猿投窯ではA類と共に併存する資料としては認められない。特徴としては湖西窯に類似する。後藤建一氏の分類（後藤1989）では合子状坏蓋C3c型式・D1c型式に相当し、湖西窯編年のⅡ期第4小期～第5小期に位置付けられるものと思われる。

坏身については大きな差異は見られず、ほぼ共通した形態に、法量が口径9.0～9.8cm、受け部径10.4～12.6cmを主体とし、たちあがりの高さが1.0～1.5cmと高く、たちあがり端部に平坦面を成形するものが見られる。こうした特徴は猿投窯の製品に類似するものと言えよう。編年の位置付けについても坏蓋A類と同様である。

以上の点から、C-1号窯はおおよそ7世紀前葉から中葉に位置付けられ、坏蓋の特徴から技術系譜としては猿投窯と湖西窯の2つが考えられるが前者が主体であったものと思われる。これはC-1号窯において猿投窯の技術を持った工人と湖西窯の技術を持った工人が共に生産に従事していたか、あるいは猿投窯の技術を持った工人が当地域で一般的に流通していた器形に形態を変えた、すなわち在地化していくものという解釈などが考えられよう。

C-2号窯は須恵器窯であるが、甕の体部破片をわずかに出土したのみで、遺物から時期を比定するには制約がある。一方で窯体については、焼成部の一部が残存していただけであったが、焼成部奥側に階段部が付設している構造は注目される。窯体内に階段部を付すのは湖西窯の特徴であり、窯体構造を検討した後藤建一氏の分類（後藤1989・1999a）ではC-II式、C-IIIa式、C-IVa式に該当するもの

と思われるが、階段部が一部しか残存していないことや、後藤氏が細分の指標としている前庭部の形態が不明なことから詳細な比較検討が困難な状況にある。各構造の帰属時期はC-II式が7世紀代、C-IIIa式が7世紀末から8世紀第2四半期、C-IVa式は8世紀第2四半期から中頃と想定されており、時間幅があるためにC-2号窯についてはこれ以上時期を絞り込むことができない。

灰釉陶器窯であるB-1号窯は碗類を主体に皿類・瓶類・壺類・鉢類・甕・風字硯・陶鍤・紡錘車・平瓦など比較的豊富な器種の生産を行っていた。縦年の位置付けについては、小笠窯における灰釉陶器の総体的な縦年を行った松井一明氏の論稿（松井1989）を参考にすると、おおよそⅣ期-1～2に該当するものと思われる。猿投窯における東山72号窯式に併行するものと捉え、10世紀後半と想定したい（斎藤1995b）。

同じく灰釉陶器窯であるD-1号窯はB-1号窯と同様に碗類を主体とするが、風字硯や瓦の欠落など生産器種が少なく、また主体である甕についても口径が小型化することや、深甕とした径高指数40前後の甕が増加するなどの差異が認められる。こうした点からB-1号窯よりも若干後出するものとして、松井氏の縦年でⅣ期-2～3に位置付け、猿投窯における東山72号窯式の後半段階～百代寺窯式にかけての時期として認識したい。実年代は10世紀後葉から11世紀前葉を想定したい。

以上の検討から、釜ヶ谷窯跡は7世紀前葉から中葉の須恵器窯、7世紀代もしくは8世紀代の須恵器窯、10世紀後半から11世紀前葉の灰釉陶器窯と断続的に生産が行われていた状況が確認される。

小笠山西南麓窯跡群の動向 今回の報告ではそれまで「清ヶ谷窯跡群」としていた範囲に、立地状況から衛門坂窯跡群を含めて「小笠山西南麓窯跡群」と呼称した。よって改めて「小笠山西南麓窯跡群」全体での生産動向の整理を先駆的成果に導かれながら行っていきたい。

小笠窯における生産の開始は衛門坂窯跡で認められる。衛門坂窯跡では5基の窯が調査されており、そのうち1号窯は建築途中で放棄された窯、2・5号窯は須恵器専用窯、3・4号窯は埴輪併焼窯として捉えられている（袋井市教育委員会1989）。操業が行われた4基の窯は陶邑古窯址群（以下「陶邑窯」と略称）の縦年（田辺1966・1981）では、2号窯はMT15型式併行期に、3号窯はTK10型式併行期に、5号窯はTK43型式併行期に位置付けられると考えられる。また、4号窯については報告者によればTK10型式併行期に位置付けられるという。以上の点から、衛門坂窯跡においてはMT15～TK43型式併行期までの生産が継続していたと言える。また、窯跡では確認されていないが、浅羽町青木遺跡においてTK209型式併行期と考えられる蓋坏が出土しており、この製品が胎土分析の結果、衛門坂窯跡のものである可能性が指摘されている（三辻1997）。これを含めれば、単発的な操業ではあるが、6世紀代を通して継続的な生産がなされていたことになる。

続く操業として衛門坂窯跡から約5km離れた釜ヶ谷C-1号窯が7世紀前葉から中葉として位置付けられる。

以降、7世紀後半から8世紀前葉にかけては現状では窯が確認されておらず、生産の空白期となっている。

8世紀後半には須恵器専用窯である水ヶ谷奥窯、瓦陶兼業窯である五郎衛門窯、猿田彦神社境内窯、瓦窯である竜天窯、寺ヶ谷窯跡が操業を行っている。水ヶ谷奥窯跡は発掘調査が行われており（大須賀町教育委員会1980）、窯体構造が湖西窯におけるC-IIIa式であることが判明し、湖西からの技術移転であることがわかった。製品は湖西縦年におけるⅣ期第3小期～Ⅶ期第1小期に位置付けられ、製品の特徴から五郎衛門窯もおおよそ同時期のものと考えられる。

再び9世紀前半には生産の空白期が見られ、続く生産は9世紀後葉の灰釉陶器窯の出現を待たねばならない。灰釉陶器窯は松井一明氏による整理に依拠すると、28基が確認されており、時期はⅡ期～Ⅳ期、猿投縦年で黒雀90号窯式3型式～百大寺窯式までの生産が確認されている（松井1989）。さらに継続して、

山茶碗窯も5基確認されている。年代としては9世紀後葉から13世紀と想定される。

以上の概観から小笠窯における生産の動向を大きく4段階に分けて捉えたい。すなわち、6世紀代の第1段階、7世紀前葉から中葉の第2段階、8世紀後半の第3段階、10世紀から13世紀に至る第4段階である。

こうした生産の継続と断続はどういった要因で生じるのであろうか。東海地域では西部に猿投窯、東部に湖西窯という2大窯がそれぞれ中心地として生産を担っている。この2大窯の動向と比較して推論してみたい。

湖西窯では、5世紀末から6世紀代において6地点と小規模な生産であり、7世紀代は45地点と増加の傾向を見せ、8世紀代には147地点と爆発的な増加傾向にあるという（後藤1995）。ただし、8世紀代については詳細に見ると、8世紀前半に132地点、8世紀後半は15地点と著しい差があり、8世紀前半の最盛期を境に急激な衰退傾向にあったことがうかがえる。9世紀以降、東海地域で普及する灰釉陶器の生産はなされておらず、12世紀に至り再び中世窯として14世紀前半まで山茶碗の生産を行っている。

猿投窯ではⅠ期：3基、Ⅱ期：16基、Ⅲ期：78基、Ⅳ期：197基と推移しており、およそ7世紀から8世紀第1四半期に該当するⅢ期において増加する状況が看取されるという（斎藤1995a）。またⅣ期において爆発的な基数の増加が見られるが、より詳細に見ればⅣ期は、生産の中心地が東山地区から鳴海・黒瀬地区へと移動するⅣ期第1小期、灰釉陶器生産への転換が模索される時期にあたるⅣ期第4小期において窯の基数が減少しており、生産状況は不安定であったようである。ただし、8世紀後半は不安定な時期であったとは言え、比較的その規模は維持されており、続くV期における灰釉陶器生産の隆盛に結びついていく。灰釉陶器生産は猿投窯において生産が開始され、V期第1小期（黒瀬14号窯式）：69基、V期第2小期（黒瀬90号窯式）：63基と9世紀は計132基と活発な生産状況を示すが、VI期第1小期（折戸53号窯式）：29基、VI期第2小期（東山72号窯式）：6基、VI期第3小期（百大寺窯式）：8期と10世紀以降は操業の規模を縮小させるとともに、生産の中心地も黒瀬地区から東山・瀬戸地区へと移動させている。

以上の様相と小笠窯との動向を比較すると、まず、第1段階とした6世紀代の状況は湖西窯も同様で、散発的、小規模な生産段階であると評価できよう。猿投窯については基数もやや多く、すでに指摘されているように地域色をも発現していることから、当地域における中心的な窯業地として安定した再生産システムが成立していたものと思われる。

続く7世紀代から8世紀代前半の様相については小笠窯とは相反する様相を示している。すなわち、小笠窯では釜ヶ谷C-1号窯での単発的な生産しか見られず、以後は生産が停止している状況にあるが、湖西窯および猿投窯は7世紀以降8世紀前半にかけて生産は拡大傾向にある。

8世紀後半は小笠窯では生産の第3段階に該当し、瓦窯を含めて比較的活発な生産状況を見せる。一方で湖西窯においては窯跡数の激減に見られるような衰退化が、また猿投窯においては全体の規模は増加にあるものの中心地区や製品の転換などから時期によっては減少も認められ不安定な様相を示している。

9世紀代は小笠窯では灰釉陶器の生産が開始されているが、まだ規模は小さい。湖西窯では生産は認められない。猿投窯において活発な灰釉陶器生産がなされている。

10世紀代は小笠窯における灰釉陶器生産の最盛期である（松井1989）。この時期においても湖西窯では生産は停止状況にある。一方で猿投窯においては窯跡数が激減し、生産規模は縮小している。

11世紀以降は小笠窯における灰釉陶器の終末と山茶碗生産への移行が確認され、湖西窯においても12世纪に至り再び山茶碗の生産が開始される。猿投窯においても継続して山茶碗生産へと移行していく。小笠窯では13世紀に、湖西窯では14世紀前半に、猿投窯では13世紀後半に山茶碗生産は見られなくなり、そのまま窯業生産の終焉を迎えることとなる。

以上、小笠窯の動向を東海地域における中心窯である猿投窯と湖西窯を軸として対比的に捉えてきた。その結果から、小笠窯における生産の消長は、湖西窯および猿投窯との動向と密接に関わるものであると考えられるのではないだろうか。すなわち、中心窯である湖西窯・猿投窯の生産が活発である時には小笠窯では生産が停止状況にあり、生産が低調であるときは小笠窯において活発化する反比例的関係である。こうした様相は製品の供給バランスを保持するための手段であったことは十分考えられることはあるが、その背景には湖西窯と猿投窯それぞれの内部の動向と受容側である小笠窯を擁する地域の背景が深く関わってくるものと思われる。

さらに技術移転の問題から小笠窯における技術系譜を見ていくと、衛門坂窯跡では陶邑福年との対応関係で位置付けが可能であったように、陶邑窯からの影響を直接的もしくは間接的に受容したものと考えられる。釜ヶ谷C-1号窯は先の検討から猿投窯の影響を主体的に受けているものと考えられた。また、生産の第3段階で見られる水ヶ谷奥窯の窯構造は湖西窯特有のC-Ill a式であり、製品も類似することからその系譜を湖西窯に求めることができる。同じ段階の五郎衛門窯も製品が類似しており、また釜ヶ谷C-2号窯も詳細な時期の特定はできなかったものの、窯構造から湖西窯に系譜が求められる。灰釉陶器生産については、湖西窯では認められておらず、小笠窯よりも先に開窯した愛知県豊橋市所在の二川窯や浜北市所在の宮口窯が地理的近縁性から可能性としてあげられるが、猿投窯からの間接的系譜として捉えることもできよう。

以上を整理すると直接的、間接的という問題は今後の課題として残されるが、おおむね陶邑窯系譜の第1段階、猿投窯系譜の2段階、湖西窯系譜の第3段階、猿投窯系譜の第4段階とでき、各段階で技術移入の経路が異なることは注目されよう。

第3段階と第4段階の生産は湖西窯・猿投窯では衰退期にあたり、また技術系譜もそれぞれ両者に対応する可能性がある。このことから、中心生産地の衰退に伴う供給の確保という機能的側面と、中心生産地における技術保持の求心力の弛緩がその背景に想定されよう。ただし、この求心力の弛緩の背景がどういった要因で引き起されたかについては消費地の動向も含め個別に検討する必要がある。

第1段階の生産については、湖西窯においてはまだ中心地としての規模を有していない。猿投窯は比較的規模も大きく継続した生産を行っているが、東海東部地域までの供給を担うほどではない。またこの段階の地方窯が猿投窯からではなく、陶邑をはじめとする「畿内」からの技術的影響を直接的・間接的に受容している点は注目される。技術移入の経路が単なる地縁的関係からもたらされるものではないことを示していよう。

第2段階の釜ヶ谷C-1号窯は、やや様相を異にする。すなわち、湖西窯・猿投窯における生産の拡大期にあたるなかでの開窯であり、またその技術を近在する湖西窯ではなく猿投窯から主体的に受容しているという点である。このことは釜ヶ谷C-1号窯の成立の背景として、第3段階、第4段階とは異なる状況があったものと想定されよう。

以上、小笠窯の動向の整理を行い、東海地域の中心窯に位置付けられる湖西窯と猿投窯との比較検討を行った。結果、小笠窯における生産の消長パターンの背景にはこの両中心窯との動向が密接に関わることがうかがわれた。こうした小笠窯の様相が地方窯成立の1つのモデルとして提示できよう。

【参考文献】

- 大須賀町教育委員会1979『清ヶ谷古窯跡群白山窯跡』
1980『清ヶ谷古窯跡群水ヶ谷奥窯跡』
1992『釜ヶ谷窯跡遺跡詳細分布調査報告書』
後藤圭一 1989『湖西古窯跡群の歴史と窯業構造』静岡県教育委員会

- 1995 「II 東海東部(静岡)」『須恵器集成図録』第3巻 雄山閣出版
- 1997 「瀬戸窯からみた間窯」『関東の須恵器』古代生産史研究会
- 1999a 「追江・賀河・伊豆の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集』1 窯跡研究会
- 1999b 「7世紀代の酒西須恵器」『古代土器研究』1 古代の土器研究会
- 斎藤孝正 1992 「須恵器の編年」東海「古墳時代の須恵器」雄山閣出版
- 1995a 「I 東海西部(愛知・岐阜)」『須恵器窯集成図録』雄山閣出版
- 1995b 「東海地方の施釉陶器生産―焼成窯を中心に―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会
- 2000 「越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」日本の美術第40号 至文堂
- 静岡県教育委員会 1989 「静岡県の窯業遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 「丸山古窯跡」
- 2003 「すやん沢古窯跡」
- 島田市教育委員会 1976 「旗指古窯跡群」
- 1983 「旗指古窯跡」
- 浜谷昌彦 1982 「旗指古窯陶器生産の年代について」『静岡県考古学研究』13 静岡県考古学会
- 田辺順三 1966 「駿員古窯跡群」I 平安学園考古学クラブ
- 1981 「須恵器人或」角川書店
- 豊橋市教育委員会 2000 「二川古窯跡群(Ⅰ)」
- 2002 「二川古窯跡群(Ⅱ)」
- 塚本和弘 1984 「尾山古窯跡群の成立と終末について」『地域と考古学』内坂鋼二先生退居記念論集刊行会
- 糸出智郎 2000 「考古学からみた古代社会の変遷」『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館
- 平野吾郎 1990 「追江・賀河における屋瓦と寺院」『静岡県史研究』第6号 静岡県
- 袋井市教育委員会 1986 「南門坂古窯跡」
- 松井一明 1988 「浜北市宮口古窯跡群の検討(1)」『静岡県考古学研究』17 静岡県考古学会
- 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 三辻利一 1997 「袋井市椎根二・三号墳および、浅羽町青木遺跡出土須恵器の胎土分析」『浅羽町史』資料編1
- 守屋惟史 1984 「追江清ヶ谷古窯跡群における灰釉陶の展開」『大阪市立美術館研究紀要4』大阪市立美術館
- 山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶碗」『概観 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社
- 山田邦和 1998 「須恵器生産の研究」学生社

写 真 図 版

写真 1



1 A地点遠景（北より）



2 A地点発掘状況（東より）

写真 2



1 伐採作業風景 (B地点)



2 B地点作業風景 (西より)

写真 3



1 B地点遠景



2 B-1号窯全景

写真 4



1 B-1号窯及び灰原



2 B-1号窯灰原近景



1 B—1号窯灰原遺物出土状況



2 B—1号窯灰原遺物出土状況



1 B地点 SX 01、SX 02近景



2 B地点 SX 01 遗物出土状况



1 B地点 SX 0 2 遺物出土状況



2 B地点 SX 0 3 遺物出土状況



1 C地点調査状況（南より）



2 C-1号窯及び灰原



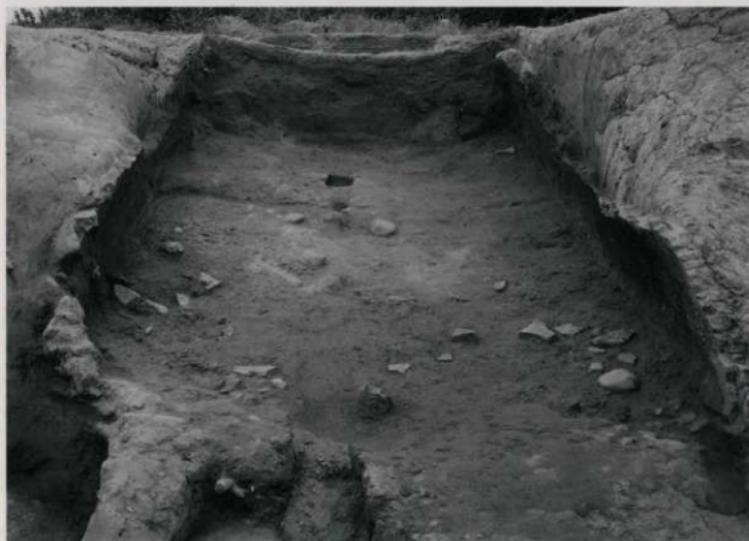
1 C-1号窑遺物出土状況



2 C-1号窑全景



1 C—2号窯全景



2 C—2号窯近景



1 C地点 SX 0 4 遺物出土状況



2 C地点 SK 0 4 遺物出土状況



1 D地点全景



2 D地点調査状況（西より）



1 D-1号窯発掘状況



2 D-1号窯及び灰原



1 D-1号窯灰原遺物出土状況



2 D-1号窯灰原遺物出土状況



1 C地点付近石垣遠景



2 C地点付近石垣近景

写真 16



9-1



9-24



9-4



9-25



9-6



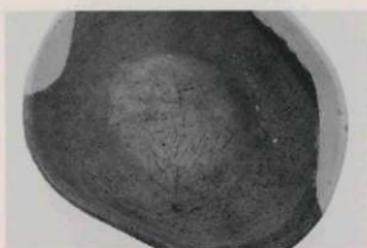
9-25



9-8



10-33



9-11



10-36



10-42

B-1号窑出土遗物



10-50



11-73



10-51



11-76



10-52



11-77



11-62



11-80



11-66



12-82



11-68

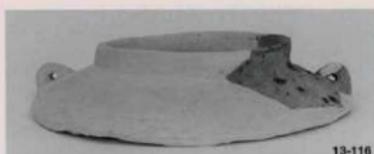


12-84





12-105



13-116



12-107



13-117



13-114



13-118

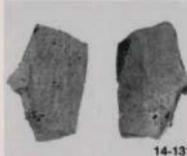
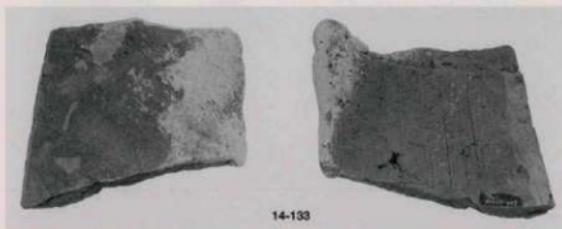
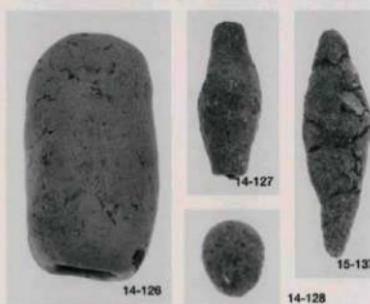


13-115

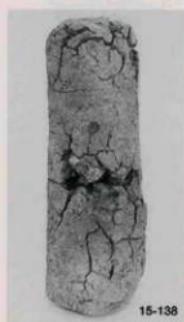


13-120

B—1号窑出土遺物



B—1号窑出土遺物





22-1



22-7



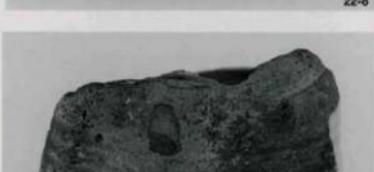
22-2



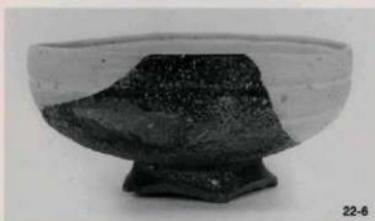
22-8



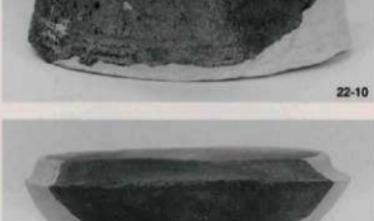
22-4



22-10



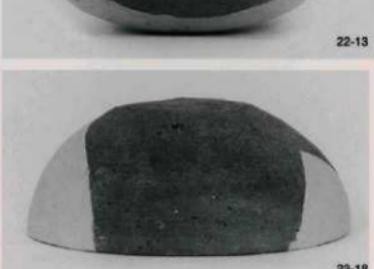
22-6



22-12



22-9



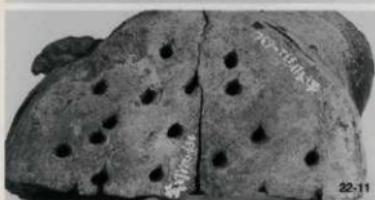
22-13



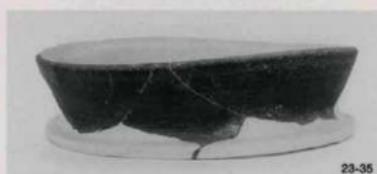
23-22



23-31



22-11



23-35



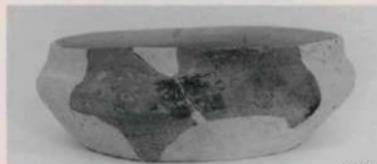
22-12



23-36



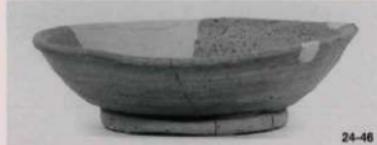
22-14



23-37



23-20



24-46



29-1



29-23



29-2



29-26



29-3



30-37



29-9



30-43



29-17



30-44



30-50



31-65



30-57



31-71



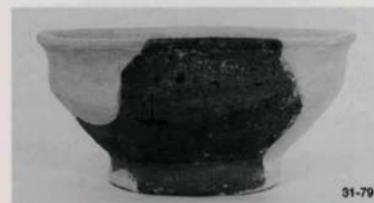
30-59



31-77



30-61



31-79



31-62



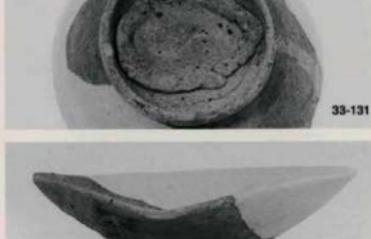
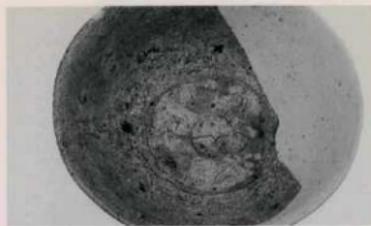
31-89



31-83



32-94





34-135



34-138



34-137



34-144



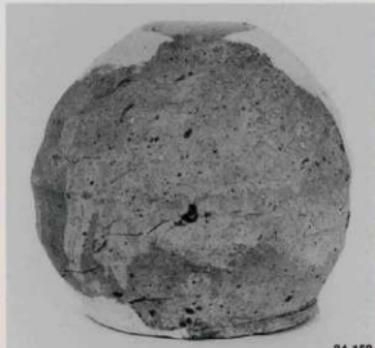
34-140



34-147



34-148



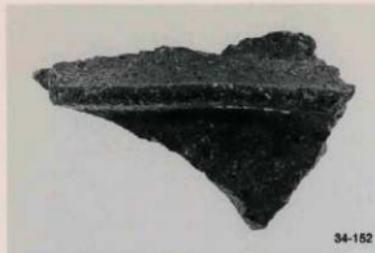
34-150



34-151



35-155



34-152



15-134



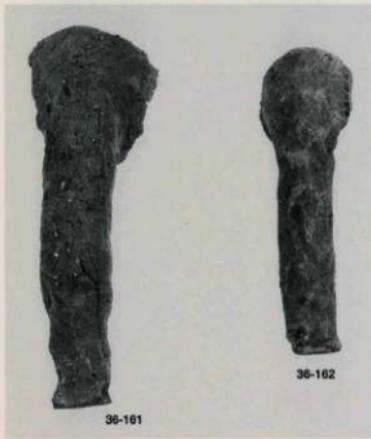
35-154



35-159

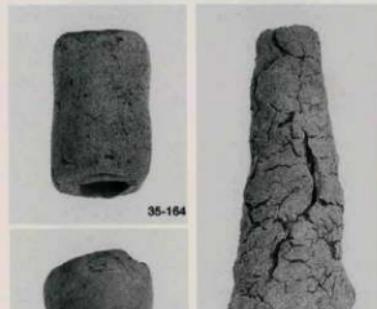


35-160



36-161

36-162



35-164

36-166



36-165

報告書抄録

ふりがな 書名	かまがやこようせきぐん 釜ヶ谷古窯跡群					
副書名	大須賀町釜ヶ谷地区区画整理事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	なし					
シリーズ番号	なし					
編著者名	木佐森道弘 森永明美 菅原雄一					
編集機関	静岡県小笠郡大須賀町教育委員会					
所在地	〒437-1333 大須賀町西大沢100					
発行年月日	平成16年3月25日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 日本側地系	調査期間	調査面積 調査原因
かまがやこようせき 釜ヶ谷古窯跡	しづおかけやこよせき 静岡県小笠郡 おおすかちょうじしたおおふみ 大須賀町西大沢	22425	27	34度 40分 50秒	137度 59分 40秒 H5.2.1 ～ H8.11.18	11,000m ² 土地区画 整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記記事	
釜ヶ谷古窯跡	窯跡	古墳～奈良時代 平安時代	須恵器窯跡 灰釉陶器窯跡	須恵器 灰釉陶器 窯道具 硯	須恵器窯跡は、小笠山西南麓に点在する窯跡群で空白だった7世紀代に属しており、窯業生産を研究するのに貴重な資料である。	

釜ヶ谷古窯跡群

大須賀町釜ヶ谷地区区画整理事業用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月25日

編集 小笠郡大須賀町教育委員会
〒437-1393 大須賀町西大渕100
発行 大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合
印刷 中部印刷株式会社
〒432-8052 浜松市東若林町1516-2

